異常事態の積み重ね

夏生　さえり
フリーランスライター

今年の5月に子どもを産んだ。と、一言で言ってしまうと、ある程度の年齢になれば何度も耳にする報告のひとつに過ぎず、もっと言えば人類（というか生物）の歴史のなかでは山ほど起きてきた自然現象？のひとつなんだけれど、実際には「子どもを産んだ」というのは、一人称で捉えるとめちゃくちゃとんでもない事件というか、ちょっと考えられないくらいの大きな変化であって、31年間歩んできた人生の中でも、いちばんの異常事態であった。「子ども産みました」「そうなんだ、おめでとう」で済んでいるなんて、考えられない。もっと「子ども産みました」「えぇ！？嘘でしょう！？産んだの！？とんでもない経験をしたんだね！？」と驚いて欲しいくらいだし、一度でも子どもを産んだ女性たちは顔に「つわり、妊娠期の辛さ、そして出産を乗り越えました」とタトゥーでもいれて、すれ違う人たち全員に「うそでしょ？あの人が？子を産んだの？」と驚きの表情を浮かべながらヒソヒソと噂話でもしてもらわないと、なんとなく納得がいかないくらいの大業である。もちろん、自分で希望して子を産んだだけだから、偉いわけではない。でも、偉くないにしても、もうちょっと褒められたい。それも産んだ直後だけでなく、死ぬまでずっと。そのくらい驚くべきことをしてのけたと思う。

よく考えてみて欲しい。もちろんわたしは子どもが欲しかったわけだから、処女だったマリアにガブリエルが「あなた妊娠しましたよ」と告げたときよりは心当たりがあるとは言え、昨日までは好き勝手にお酒を飲み、夜更かしをして、ラーメンばかり食べて、自分の身体を自分だけのものとして謳歌していたのに、妊娠していると診断された途端から、「もうひとりだけの身体じゃないんだから……」と心配され、管理される立場になるのだ。夫も医者も両親もお腹を見つめてはなにやら愛おしそうにして、「体調どう？」「とにかく気をつけるんだよ」と言う。でもそれはわたしの身体を気遣っているのではなくて、わたしの身体の中にいる謎の生き物（としか思えないのだ、最初は）に向けられた言葉

で、まだ当人の実感はないうちから世の中のほうがわたしをかつてのわたしとは違う目で見てくる、その違和感。身体的な意味でも、社会的な意味でも、不可逆なベルトコンベアにいつのまにか乗っていて「待った！ストップ！」と声をあげることもできないおそるべき超変化。30年間も付き合ってきた自分があっという間に変わっていくのは、正直、恐ろしさすらあった。これまで街で見ていた妊婦も、当然ながらこの戸惑いの中にいたはずなのに、その過程に思いを馳せたことなんてなかったなあと自分の想像力の無さを呪うしかなかった。

いくらなんでも人間ひとりが入るほどには膨らまないだろうと思えたペタンコのお腹の皮は伸びに伸びつづけて、臨月には風船を入れたようにまんまるにせり出す。皮がパンパンに張ったせいでおへそはボコンと出べそになって、限界まで膨れた腹はグロテスクな色へ。あれだけ思春期に「大きくなりますように」と祈りながら体操をしても全く効果がなかった胸はびっくりするくらいに膨らんで（ただしセクシーには大きくならない。あくまで”母仕様”に大きくなる）、乳首の色が濃くなり（赤ちゃんがおっぱいを探しやすいように、らしい。やめていただきたい）、骨盤が広がってお尻が四角く変わり、歩くだけでフゥフゥと息があがって、立っても座っても寝ても苦しく、四六時中、自分ではない別の生き物がドコスカドコスカと乱暴に腹を蹴る……。

身体が、おかしなことになっている。明らかに異常事態。
それなのに、病院では「人類の歴史のなかで山ほど見てきた妊婦のひとり」として扱われて、ネットで調べる情報はすべて自分に当てはまる…。なんだか、自分が本当に「ヒト科の雌」に過ぎないのだなと思い知らされるようなことばかり。それは不思議で奇妙でちょっと切ない気分であった。

さらに、妊娠が進むと自分では何もできなくなって、妊娠後期ともなれば高い収納棚に入れてあるトイレットペーパーを取り出すだけでも夫に頼まなければならなかった。「言ってくれたら取るよ」と夫は優しく言うけれど、たかがトイレットペーパーを取るだけでもいちいち「取って」と言わなければならないことが苦痛で苦痛で仕方がなく、そうなってはじめて、自分がいかに「自立」と「自由」を大事にしていて、どれだけそれらを愛していたのかに気づいたりもしたのだった。わたし、自分が自由であること、自分を自分でコントロールできることに、こんなにも喜びを感じていたんだ……。

そう、あの時期は、自分自身との新しい出会いでもあったように思う。
赤ちゃんが生まれることへのとてつもない喜びも、もちろんある。でも、実感

はなかなか湧かず、それよりも、つらい、くるしい、きつい、しんどい、を繰り返していた妊娠期間。その長いようで短い時間を経て、息子は生まれた。たかだか子どもを産んだだけ。でもその時間に、わたしの身体と気分は乱気流の中を突っ走って跡形もないほどにもみくちゃになり、わたしってなんだ、女ってなんだ、母になるってなんだ、と主語の大きな疑問が頭を駆け巡り、その果てに時空すら歪んで、かつてわたしを産んだ母や、誰かを産んだどこかの妊婦とリンクして、「ああ、あなたもこんな異常な時間を味わっていたのね」と時空を超えてかたく抱き合い、励ましあってきたのだった。

そうして息子が生まれて、もう7か月が経つ。自分を再形成する暇も与えられず、妊娠期間からずっと混乱が続いているような日々。

彼を寝かしつけたあと、弓なりに身体を反らしている息子のちいさな鼻の穴から吐かれる息をたっぷりと顔に浴びながら、彼を観察しているとふと妙な気持ちになる。一体、息子はどこから来たのだろう？ いや、わたしのお腹から、なのだけど、思えば彼はたった数ヶ月前まではここにはいなかったのだ。もっと言えば、2年前までは存在すらしなかった。普通「出会い」と言えば、どこかにあった人や物と、どこかにあった人や物が、何かの拍子でめぐり会うことを言うけれど、息子との出会いはこれには当てはまらない。彼は、どこにもいなかった。生きていなかった。それがある日突然、この世にぽんと生まれて、まっさらの状態で、わたしと出会う。こんなにもまぶしい出会いって、他にあるんだろうか。何を見ても、何を聞いても、すべてはじめて出会うもの。そう思うと、混乱の中でも、彼の命の眩しさに涙が出そうになるのだった。

最近の息子は、目がよく見えるようになってきたようで、抱き上げているときょろきょろと辺りを見回す。彼が一点を見つめているな、と思えば、そこには必ずなにか彼の目を引くものがある。バスに乗っていれば、彼の手が届く範囲にあるでっぱりをじっと見つめてそれで遊び、すぐ横にある手すりを触り、前に座るおばさんの帽子の飾りを見つめ、「止まります」と光る文字を指で剥がそうとする。同じ場所に座っているわたしがまったく見ていないものに、いま彼は出会っている……。街を歩いていても同じ。彼の目線を追って上を見上げると、鳥たちがかたまりのようになって飛んでいくところであったり、天井に不思議なデザインの電球が施されていたり、おおきなファンがくるくると回っていたりする。毎日、毎分、彼はちいさな身体で世界に出会う。その横でわたしも、世界に、わたし自身に、出会っているのだった。彼を抱いているだけで、世界が拡がり続けていく。この妙な感覚が、育児の醍醐味というものなんだろうか。

異常事態の果てに生まれてきた息子。でも、それらを全部抱きしめているわたしも、かつては彼と同じように生まれ出て、はじめて世界に出会ってきた。夫も、あのおじさんも、あのおばさんも、ひいおじいちゃんも、ひいひいおばあちゃんも皆同じように異常事態の積み重ねの果てに出会い、出会いを繰り返して、死んでいく。その大きな流れのなかに立ってはじめて、出会いの美しさに心が震える。

妊娠、出産、そして育児の日々は、辛くてしんどくて、でもとびきりの愛と、そしてなによりも未知で満ちている。同じ場所で、同じ自分で生きてきたはずなのに、こんなにもちいさな人間がひとり生まれただけで、いつのまにか「わたし」が変わり、知ったつもりになっていた世界は二倍にも三倍にも膨らんでいる。

いまのわたしは、ありきたりでありふれていて、けれども本当に美しい体験の最中にいる。いずれ息子は、かつてのわたしのように出会いの連続の日々を忘れてしまうだろう。そのころには、わたしも、彼の命の眩しさと出会いの美しさを忘れているかもしれない。だけど、せめていまだけは、彼を抱きしめて彼の目線を追いかけられるいまだけは、すこしもこぼさぬように、彼の薄焦げ茶の瞳が捉えるものをわたしも一生懸命に追いかけていこう、と思うのだった。

技術は人を幸せにするか

成田 真弥
リアルテックファンド　エンビジョンマネージャー

課題解決ファーストの投資ファンド

私は「リアルテックファンド」という研究開発型スタートアップに投資するVC（ベンチャーキャピタル）ファンドに所属しています。「リアルテック」とは「地球や人類の課題解決に資する技術」を意味する造語で、リアルテックを有する企業に投資・支援する事で社会課題解決に貢献する事を目指しています。

VCファンドは、未上場企業に投資して上場や買収による株式売却益を得る事を目的として投資家からの出資金で組成されます。その仕組み上、徹底的に利益の追求が求められる組織体ですが、リアルテックファンドは設立当初から社会課題解決を最優先目的とし、「課題解決ファースト」で投資家から資金を集め運営している稀有な組織と言えます。

昨今ではESG投資やインパクト投資といった経済性と社会性を両立させようとする世界的な潮流が生まれ、リアルテックファンドも今年、第三者機関によるインパクト評価を導入し、新たに100億円のインパクト投資ファンドを開始しました。

企業の「意味と価値」を問い直す

VCファンドの主な仕事は投資になりますが、企業価値を最大化させるために、資金調達や事業開発の支援だけではない幅広い専門的支援も行うケースが増えてきました。リアルテックファンドも採用や知財といった多角的な支援を行っており、私はその中で広報やデザイン制作など「表現戦略」の支援を通じて、企業が有する「潜在的な価値」を「顕在的な価値」に変える支援を行っています。

投資先が有する技術やそれに基づく事業は難解で、研究者出身の経営者が多い事もあり、自分達では理解できていても、外部の人に十分に価値が伝わる表現ができていない場合が多々あります。

そこで「思考実験ワークショップ」という実践を通じて価値の可視化を行います。そこでは、「思考」と「対話」を通して、企業のパーパス（存在意義・目的）とそれを前提としたビジョン（未来のあるべき姿）を再確認しながら、そこに至る

ロードマップ（道筋）を可視化していきます。私はこれを企業の「意味と価値」を問い直す行為と捉えています。

これまで「サイボーグ技術」や「細胞培養肉（人工肉）」といった革新的な技術を持つ企業に対して、その技術に関連する哲学の専門家や料理人といった外部ゲストを迎えて実施してきました。プロセスとしては、初めに外部ゲストからの問題提起がされ、そのテーマについて各々で徹底的に考える時間を取り、そこで炙り出された各々の考えやイメージを元に参加者同士で対話し、図や文章、ビジュアルとして可視化していきます。その情報は、LOGOデザイン、WEBサイト、コンセプトムービー、プロダクトデザインといったクリエイティブ制作や、プレスリリース等の広報活動に活用されます。

こうした表現戦略支援は一筋縄ではいかない事も多いのですが、その経験の中で幾つかの気づきがありました。その気づきを足掛かりに、大袈裟かもしれませんが、これからの技術と人の関係について少し考えてみたいと思います。

考える余白の無い「早すぎる」時代

思考実験のような体験をすると、日頃から物事について徹底的に考え抜く習慣が無い事を痛感します。「この技術が社会に出たら誰を幸せにするのか」といった本質的な問いは本来真っ先に考えるべき事ですが、当事者である経営者も忙しない日々の中で考える「余白」が無いのが現状です。

特にスタートアップ経営者は、限られた期間での上場を目指しながら、会社と従業員の人生を背負っていく重圧の中で、キャッシュフローのやりくりに心を砕き、（私たちのような）株主の意向や同業者から様々な影響を受け、日々大量の情報を浴びているわけですから、落ち着いて考える時間が取れないのは致し方ない事です。とは言え、このような状況は現代の社会人であれば似たようなものかもしれません。常にスピード・生産性・効率・合理性を求められる日々の中で、私自身、半ば思考停止に近い状態の時もあります。

人の「心」を理解する難しさ

また、企業の意味や価値を問い直そうとすれば、必然的に人の心という曖昧な世界に踏み込む事になります。企業は本質的に人と関係性で成り立っているので当然と言えば当然です。多くの場合、企業が掲げているビジョンやパーパスが何に基づいているか曖昧な事に気づきます。この事業は創業者・経営者が心の底からやりたい事なのか、何かしらの原体験を経て使命感を感じているのか、発明者から託された技術だから世に出したいのか。例えそのような言葉が本人の口から出たとしても、本人さえ気付かない潜在意識に基づいている可能性もあり、必ずしも事実とは限らないのが難しいところです。

これは経営者が自社や自分自身をはっきり認識できていないという事ですが、私自身も含め、自己認識できていると自信を持って言える人がどれくらいいらっしゃるでしょうか。それほど人の心を理解する事は難しいと実感します。

手段が目的化する危険性

言うまでもなく、技術やお金は課題解決のための手段ですが、多くの関係者と事業目的について対話していると、目的化しやすい危険性があると感じます。研究開発型スタートアップに特に起こりやすい事だと思いますが、技術の価値を起点にして思考や対話を進めようとすると、どうしても技術を活かすための発想になりがちで、技術のための事業モデル、技術のためのビジョンというように、目的と手段が入れ替わってしまう逆転現象が頻繁に起こります。しかも技術の革新性や独自性が強いほど事業の可能性は広がり、あれもこれもとアイデアだけは増え、結局何がしたいのか分からなくなってしまう事もあります。

技術の価値は目的と対象次第なので、どんな課題に対する解決策かによっても変わるものです。そして全ての手段には効果とリスクの両面があります。特に技術とお金には「限度を超えて拡大する」という共通性があるように思えます。新しい技術が生まれると、新しい価値が生まれると同時に、その恩恵を受ける者とそうでない者の間に差異が生じます。経済学者の岩井克人氏が資本主義の本質を「差異性から生じる利潤」と述べていますが、だとすれば、新技術が生まれるほど資本主義経済は活性化するのは当然です。また、科学哲学者の広井良典氏が資本主義について「(西欧)近代科学の基本的な世界観や態度と同じ構造をもっている」と指摘しているように、特に産業革命を経て科学技術が広まる19世紀以降は、領土拡大を伴った経済成長と科学的発見による新技術開発が互いに促進し合い、歯止めの無い拡大と成長が現在まで続いているように思えます。

だからこそ技術には現実を変える力があるわけですが、人類が核兵器をはじめとする多くの殺人兵器を生み出した事から明らかなように、目的と使い道を誤った際のリスクも大きくなります。これだけ自然環境破壊が顕在化してもなお、各国の政策や論調の多くが経済発展を大前提としている現状を見ると、私にはこの社会全体が「ブレーキの壊れた自動車」のように見えます。

人の創造性をひらく技術

本当に人類と地球を持続させたいのであれば、アクセルを踏み続けるだけでなく、理性や倫理観というブレーキも持ち合わせたいものです。それは自分自身や他者と真摯に向き合う事でしか育たないものだと思います。我々リアルテックファンドのような社会貢献を標榜する組織や、社会インフラや日常生活

を変える可能性のある技術を有する企業、社会的影響力のあるリーダー達が、少しでもブレーキの必要性を認識してくれる事を願っています。

技術というものを突き詰めて考えてみると、火や言葉や石器など、何かしらの道具を使い始めた猿を人間と呼ぶのであれば、本質的に「技術は人間の一部」と言えます。そしてお金もまた技術の一つと言えるでしょう。火や石器による調理が健康な食生活を生み、言葉や文字が意思の伝達や未来への継承を可能にし、治水や土木建築が安心な暮らしを実現しました。このように技術は、人類に新しい生き方や価値観、関係性や仕組みをもたらしてきました。その過程で多くの悲劇が生まれたのも確かですが、人の創造性をひらき、新しい意味や価値を生み出してきた多くの技術によって、人類が豊かさを享受してきたのも事実でしょう。

新しい技術が幸福か悲劇のどちらをもたらすかは、それを使う者たちの認識力や人間性にかかっていますが、高度に複雑化した現代社会では至難の業です。少なくとも超効率化やDXで全て解決できるかのような稚拙な思考は卒業する必要があるでしょう。思想家のケン・ウィルバーが言うように「すべては正しいが、部分的である」としたら、一人ひとりの幸せという基本的な目的を見失う事なく、自然環境も含めた共生と持続性を目指せる新時代のリーダーシップの在り方が求められているのかもしれません。

新しい技術を使えば人が幸せになるのではなく、人が幸せになるための手段として技術があります。私は、全体最適を目指せる創造的なリーダーが扱う技術であれば、人を幸せにできると信じています。

心と向き合う余白を

手段であるお金や技術に振り回されず、本当の目的のためにそれらを役立てるために、生活と仕事の中に「考える余白」を意図的に設けてみてはいかがでしょうか。生きる意味や幸せのために本当に必要なものが何かを落ち着いて考えてみたり、たまには家族や仲間とそんな話をしてみたりしたら、思いがけない気づきがあるかもしれません。

あなたの仕事は誰のためのものでしょうか。あなたの好奇心や情熱は、本当に自分の中から生まれたものでしょうか。あなたが使っている技術はあなたを幸せにしているでしょうか。そうした思考や対話の中で、本当に必要な技術やお金の使い道が見えて来るかもしれません。

対話とセックス

二村 ヒトシ
AV監督

セックスについて、ずっと考えている。四六時中そのことばかり考えている。あんまり四六時中そういうことばかり考えているので、あの人は変な人だ（実際そうなのだが）と差別をされることもある。しかしセックスをテーマにして哲学対話をやると、けっこう多くの変ではない人々が集まってくれる。集まった人たちはセックスについて考えることが許された場所を求めていたのかもしれない。一人で考えこむのではなくて、セックスについて誰かと話をしたかったのかもしれない。

しかし否定をされたり攻撃をされたりする可能性がある場所では、セックスについての自分の考えや体験を自由に話すなどという恐ろしいことは、できたものではない。そんなことは心理的な安全性が保障されていない場所ではするべきではない。そこで、（だから、）哲学対話である。

【報告】こまば哲学カフェ　二村ヒトシ　「シリーズ　セックスと性の〈なぜ？〉を考える」
https://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/blog/2020/10/post-964/
梶谷真司　邂逅の記録114　「セックスという磁場を求めて～二村ヒトシさんとの対話」
https://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/blog/2021/03/114/
「自分と他者を知るための哲学対話で、"思い込み"から自由になろう」
https://www.note.kanekoshobo.co.jp/n/n0cc095bc8965

ふだんはおおっぴらに話すことが許されていないような自分の欲望について、そのことをいっしょに考えてくれる誰か（日常はともにしていない、つまり後腐れのない誰か）と話をしながら深く考えるというのは、たいへんよいことであるように思われる。

また僕のように集中力というものがない人間にとっては、時間を区切って、この時間内は誰かがいっしょに同じことについて真剣に考えてくれるという

のはとてもありがたいことである。考えが進む。他の人が言っていることを真剣に聴いて「この人はなぜこういうふうに考えるのだろう」とさらに考え、疑問に思ったら質問したり（質問が、けして詰問や尋問にならないように）してみて、どんなに自分とはちがう意見をもっている人がその場にいたとしても、けんか腰の議論はせず、しかし無視したり「ほっておく」こともせず、黙りもせず、ただ「なるほど。そう考える人もいるんだなあ……」と真剣に考え、なるべくその場で「あなたはそう考えるんですね、私はこう考えます」と、その人に真剣に伝える。そのうちに〈いっしょに考える時間〉は終わる。

それで何が残るのかというと、世の中には自分とはちがう「ああいう考え」をもっている人もいて、その人が生きている人間なのだとわかった、という経験が残る。それから、自分とちがう意見を〈生の声〉で聞くことによって「はて、自分のほうはなぜ〈こう考えている〉のだろう？」という疑問がわき、さらに考えざるをえなくなる。思考停止のままでいることはできなくなる。

それから、これはちょっと楽観的な考えかもしれないが「むこうも、きっと同じように〈あの人も生きた人間だ〉と感じてくれただろう」と、まぁ、なんというか、信じてみることができる、ような気が僕はする。

「哲学対話はセックスである」というのは、あくまでも僕の理想論である。

理想論ではなく意見として言うならば、僕は「どうせセックスするなら、そのセックスは対話でありたい」と言いたいのである。

これはおそらく「日本人は」とか「現代人は」とかそういう主語ではなく「セックスの本当の楽しさを知っていない人は」という主語（そして「僕こそが、その楽しさを知っている者である」と言いたいのでもない。そうではないし、かりにそうなのだとしてもそんなエラソーなことは恐ろしくて言えない）で述べるべきだと思うのでそうするが、セックスの本当の楽しさをまだ知らない我々は、対話のようなセックスではなく、つい議論のようなセックスをしてしまいがちである。

あるいは、セックスとは議論のようなものだと多くの人が認識しちゃっているから、セックスをおそれる人や、セックス（や恋愛）を相手を支配するためのツールとして使おうとする人が、世の中に多いのかもしれない。

議論のようなセックスとはどんなセックスだろう？

対話のようなセックスとはどんなセックスだろうか？

議論のようなセックスはするべきではない。それはきもちよくないからである。

対話的な人間はセックスも上手い、のかもしれない。

もう一歩ふみこんで「セックスとは対話だ」と言い切ってしまうことができ

るなら、逆に「対話とはセックスだ」と、すなわち「セックスすることによってもたらされるのを期待することのうちのほとんど（身体的な性的欲求を発散することと生殖以外のすべて。すなわち、おたがいを尊重し肯定しあうこと）は、対話によってももたらされるのだ」とも言えるのではないだろうか。

つまり、もしかしたら「対話的な人間は、むだなセックスをしないようになる」とも言えるのかもしれない（むだなセックスも人生にはときには必要なのかもしれない、あるいは、むだなセックスをせざるをえない人というのもいないわけじゃないよね、といった話にはここでは深入りしない）。

対話ということばは最近、世の中で流行りすぎだろう。それどころか「対話ということばは世の中で流行りすぎだろう」という言説すら世の中で流行りすぎだろう。

対話ということばが世の中で流行りすぎだと言う人は「みんな、ほんとに対話してるの？」と言いたいのかもしれない。本音では「対話なんて必要ない」と言いたい人も「対話とは危険なものである。大丈夫か？」と言いたい人も、中にはいるかもしれない。

対話が危険なものなのかどうかは僕にはわからないが、セックスは危険なものである。なぜならセックスとは相手の存在が、こちらの存在の中に入ってきて、こちらも相手の中に侵襲して、おたがいを変えあう、おたがいが変わってしまうことだからである。これはセックスだけではなく〈恋愛〉も同じである。だから、変わりたくない人はセックスや恋愛をしないほうがいい。

おそらく対話も、そうなのだと思う。

対話することは「おたがいが変わること」だし、だから自分が変わってしまうことだ。

変わりたくない人は対話をしないほうがいい。自分は変わりたくなくて相手だけを変えたい人、つまり〈教育〉がしたい人や、自分は一切変わりたくなくて世の中だけを変えたい人、自分には知識があるのだということを相手に誇示したい人などは、そのことに対話を使わないほうがいいだろう。個人の見解です。

こっちは真面目な話をしたいのではなく哲学がしたいのである。

障壁を超えて、出会いにかける

野口　綾子
急性・重症患者看護専門看護師＠TMDU

眼に見える世界はアンフェアだが、同時に太陽は万物に輝く。どうしてこのタイミングでこの人がこの病に苦しむのか、どうして失うことになるのか、アンフェアなことばかりだ。一方で、ある日、どの人も死ぬ。またどの人も病にかかりうるし、どの人も大事なものを失いうる。と同時にどんな凄惨な状況や場面にも静かに希望は流れている。ただ、これらの眼に見えない平等さや希望も見える人には見える、それがあると知っている人や信じている人、あるいは見える人と出会うことで見えるのかもしれないと思っている。

看護師としてケアを生業とする中では、誰かにとってかけがえのないたったひとりの誰かと出会う。それもたくさん。それぞれの望みは目に見えないことの方が多いが、その望みに沿えるようにケアをデザインするのが我々の仕事である。そして目の前の一人の人、患者さんをケアするとき、その人にとってよりよいケアを実現するために必要不可欠なのが、仲間や同志だ。「目の前の人にとってよりよいケアとは、医療とは、人生とは」。その問いを誠実に真摯に探求していく仲間や同志である。その問いは、本人に問うていくことになるが、時にその人を大事に思うあるいはその人が大事に思う人たち、たとえば家族とも問いを共有することになる。（ここでの “家族”は、血のつながりや法的な定義は関係ない）この問いの正解は、目の前の人本人が持っているとは限らず、むしろないと言っていい。ただ正解はないと言いながら、我々はあると信じて探求しつづけている。協働という言葉を使うが、専門家の資格を持った医療者や、法的に権利や関係性がある人たちが集まって一緒に望みやよりよいケア、よりよい医療の探求をする。ここにも出会いがある。ただメンバーが集まればいいわけではなく、この刹那に「目の前の人にとって」の問いを探求するつながりを持って出会えているかが、状況やケアの質を結果として大きく変化させる。お互いが「目の前の人」とどう出会っているかで、物理的にそこに居ることや直接触れることや対話することの意味が変わる。

生死の瀬戸際で問いを探求する本人も含めたそれぞれが、誰として何者として何のためにここにいるのか、問われてもいるようにも思える。

Aさんは以前から「私は自分で自分のことがわからなくなったら、そんな状態で生きるのは辛い」と長年連れ添ったパートナーに話していた。そんなAさんが、生命の危機的な状態に陥った。まったく予期せず突然に。駆けつけたパートナーは医師から、Aさんが重篤な状態で意識がなく治療を今すぐに始めないと命が助からない状態だと聞く。「身体に多くの様々な医療機器を装着し、手術やできる治療をしても助からない可能性もあります。命が助かったとしても、Aさんは仕事に復帰したりパートナーと話したりするのは難しいかもしれない。」と医師は言う。パートナーは、Aさんの言葉を思い出し、医師に問う。「命が助かっても自分のことがわからなくなったりするんでしょうか」。医師は「どうなるか、今はまだわかりません。自分やあなたのことはおそらくわかると思いますが、今までのように、話したり自分のことを自分でするのはかなり厳しいと思います」と言う。

この状況で“Aさんは何を望むか”想像してみてほしい。というと、あなたはどんなことを想像するだろうか。

実際、さまざまである。そもそも想像すらせず一般論を述べるだけの人もいるし、パートナーの立場で「Aさんに助かってほしい。けど、もし話せなくなったらAさんに恨まれると辛い。」と想像する人もいる。あなたが看護師や医師であれば、自分がこの場に立ち会う看護師や医師だったら、と想像するかもしれない。ただ想像してみてほしいのは、誰もがなりうる、Aさんとしてである。

私にとって仕事柄日常的な場面が多くの人にとって非日常であると知っている。自分も人なのだけどMemento mori.「死ぬことを忘れるな」というほどに私たちは、人が死ぬということを案外忘れがちないきものなのだと思う。

先日、友人から連絡があった。祖母が入院したのでお見舞いに行ったとのことだった。高齢で認知症があり十分食事がとれず点滴をしていたが、孫は認識できてすぐにニッコリし喜んでくれたそうだ。ただ点滴を抜いてしまうので両手を縛られており、看護師は「お孫さんがいてくれている間」縛られた両手をほどいていった。友人は帰り路、実家の家族に「たった一人の実の親に、あんなことをさせておいていいのか」と電話した。しばらくの沈黙の後、「じゃああなたはそれでなぜ帰ってきたの」と問い返され、言葉を失ったと友人は涙声で言った。点滴しない選択もあると医師は言っている、ご家族から点滴してくださいと希望があった、夜になると本人は帰りたいと繰り返している、と看護師が言っていたのが思い出され、私に連絡したとのことだった。

想像してみてほしい。あなたは誰の立場で何を望んだだろうか。

私たちが出会う人々はそれぞれの望み、さまざまな欲求を有している。私たち看護師も同志の医療者も、人であり、それぞれがそれぞれの想いや状況、立場から望みをかなえたいと願う。誰の望みが正しいか、そんな問いの立て方をし

てもまた正解はない。そしてときに人は間違える。これが正解だ！と確信してしまったりする。安心して正解に進んでいきたい、そう願うのも人の望みであり、正解があると言って欲しかったりする。凄惨で厳しい現実のなか、正解がないことに耐える我々に対して、外野から好奇の目で見る人や関心を持つ人にも出会う。Quid rīdēs? Mūtātō nōmine dē tē fābula narrātur.「なぜ君は笑うのか？名前を変えればこの話はあなたのことを語っているのに」。あなたにも起こりうる非日常が、私たちの日常であるだけ。それ以上でもそれ以下でもない。正しさは答えに求めるよりむしろ問いを立てることに求めたほうが、進む道や光がみえてくるはずだ。

私が普段こういった話を語りたい相手は、目の前の人をケアする仲間や同志であり、ケアされるつまり自分たちがケアする相手、患者さんやそのご家族である。とてもつらく困難な状況に置かれたときに、それでもそこに静かに流れる光を信じてともに目を凝らしみつけられるように。それぞれが、お互いが、出会えるように。今回のイベントでZoomの画面越しで顔の見えない人たちに話すのは私にとって挑戦でもあった。うまく出会えるだろうか。拙い言葉で誤解や不安を招いたり、聞きたくもない話に傷つく人がいたら、どうしよう。心を決めたのは、私はそもそも出会いをこれまでも選べなかったし、これからも選べないと気づいたからである。それにどの人にもSōl omnibus lūcet.「太陽は万物に輝く」のだから。そして背中を押してくれた友人や、支えてくれる友人に恵まれていることにも気づくことができた。彼らと、またこれまで耳を傾けてくださったすべての方にこの場を借りて深く感謝を申し上げたい。ありがとうございました。

高校教育の改革は誰のため？ ～ 一校長のつぶやき

萩原 聡
前全国高等学校長協会長、東京都立西高等学校長

1　私のこれまでの経歴

大学では経営工学を専攻し、1987年4月から東京都立南高等学校の数学科教諭として教員生活を始めました。学校にもパソコン教室が設置され、校務処理だけではなく教育への活用が叫ばれ始めた頃でした。私も研修会に参加し、翌年から講師として多くの先生方と関わりました。1992年4月に都立砧工業高等学校に異動し、1999年度から東京都荒川区教育員会指導主事として、2002年度から東京都教育委員会指導主事、統括指導主事、主任指導主事として、教育行政に従事しました。2009年度から都立片倉高等学校長、2012年度から都立昭和高等学校長、2016年度から都立江北高等学校長、2018年度から現在の都立西高等学校長として務めています。

この間、多くの方々からいろいろなことを学ばせていただきました。文部科学省関係では、2014年から6年間教科用図書検定調査審議会臨時委員として、算数・数学の教科書記述について勉強しました。また、2019年から2年間中央教育審議会臨時委員、大学入試のあり方に関する検討会議委員として関わりました。さらに、2018年から2年間日本数学教育学会副会長、2019年5月から2年間全国高等学校長協会長として従事しました。この2022年3月で定年（60歳）を迎えます。

2　高等学校の今

学校教育法第50条　高等学校の目的では「中学校における教育の基礎の上に、心身の発達及び進路に応じて、高度な普通教育及び専門教育を施すことを目的とする。」と定められています。高等学校入学に当たっては、1963年（昭和38年）の旧文部省通知では、「適格者主義」を取っていましたが、その後「15の春を泣かせない」等の世論の流れから、「学ぶ意欲と熱意のある者を進学へ」と変わり、高校へはほぼ全入の状況となっています。

このような中で、都立高等学校全日制普通科（109校）においても、地域性や中学校までの学びの習熟の差もあることから、卒業時の進路先（大学進学対応校、進路多様校）などにより輪切り化・固定化が進み、日々の生活指導、学習指導、進

路指導、部活動指導のほか、保護者からの要望も多様化してきており、学校ごとに対応すべき課題が異なっています。

３　校長としての4校での取り組み

(1) 都立片倉高等学校（在職：2009年4月～）

・昭和47年八王子市片倉に全日制普通科高校として開校。

・現在、普通科5or6クラス、造形美術コース（平成4年設置）2クラス

・目指す学校像「友と学び、創り、明日を拓く学校」

・吹奏楽部（2020東京オリンピック閉会式出演）、硬式野球部（平成30年夏西東京大会ベスト8）

・進路状況（四大39%、短大9%、専門38%、就職6%）2020年3月

平成9年に最寄駅「八王子みなみ野駅」が開業するまでは交通不便校で、地域の評判も良くありませんでしたが、学校運営連絡協議会委員に町会長や駅前のコンビニ店長などに就任いただき、地域の声を反映させるなどの学校運営を重視しました。充実した学校生活を望んで入学する生徒と仕方なく入学する生徒の2極化もみられましたが、地域行事への参加や地域散策（近隣の「絹の道資料館」の活用、ＰＴＡによる給水所設置）を通して、「高卒」ではなく「片倉高卒」と自信を持って言える「母校愛」を育んできました。また、初挑戦となる種目のラクロスの女子同好会を創設させ、近隣の大学生から指導を受けるなど、運動部が盛んな男子だけではなく、女子にも新たな種目で活性化を図りました。吹奏楽部での国内外の活動や造形美術コースでの作品作りなど、高校時代の充実は図られていますが、卒業後の進路にどう結び付けていくのかが課題でした。

(2) 都立昭和高等学校（在職：2012年4月～）

・昭和24年昭和町（現在の昭島市）立昭和高校として開校。

・現在、全日制普通科8クラス（2008年度末定時制閉課程）

・目指す学校像

「明日に挑戦、授業で勝負・高める学力、部活で青春、昭和で拓く君の進路」

・教育目標の標語「二兎を追い、二兎を得る。」

・2014年都教委アドバンス校に指定、ミッション「多摩地域の中堅上位校の充実」。新校舎落成。

・進路状況（四大85%、短大1%、専門1%）2020年3月

地域の評価は低く、「昭和は『自由』な学校」で入学時に見合った進学先ではなく、地元中学校からの入学者は少数という状況でした。部活動とアルバイトで家庭学習をしないため学力は定着せず、入れた大学への進学となっていました（2010年3月時、四大60%、短大4%、専門16%、就職2%）。着任時、生活指導を重視しており、アドバンス校の指定や校舎改築も相まって、週末課題の導入など家庭学習の定着を図る学習指導や「生き方」や高い志を持続させるための進路指導

が功を奏し、地元中学生や保護者から支持される高校へと変わってきました。

(3) 都立江北高等学校（在職：2016年4月～）

・昭和13年府立第11中学校として開校し、足立区綾瀬に校舎を建設。
昭和25年都立江北高校と改称。

・現在、全日制普通科8クラス（2021年度末定時制閉課程）

・目指す学校像「地域に誇れる進学校」「文武両道を実践する学校」「地域社会に貢献する学校」

・2010年都教委進学指導推進校に指定。

・2014年都教委アドバンス校に指定、ミッション「東部地域の進学校の充実」。

・2019年新校舎落成

・進路状況（四大70%、短大1%、専門16%）2020年3月

足立区内ではトップ校であるが、成績上位層が敬遠し中堅上位層止まり。入学時の基礎学力に課題があり、家庭学習の定着が課題。同窓生から進学先について強い要望はあるが、現実との乖離がある。

(4) 都立西高等学校（在職：2018年4月～）

・昭和12年府立第10中学校として開校し、杉並区宮前に校舎を建設。
昭和25年都立西高校と改称。

・現在、全日制普通科8クラス

・目指す学校像

「国際社会で活躍できる調和のとれた大きな器の人間を育てる。」

・2001年都教委進学指導重点校（難関国立大合格を目指す）に指定。

・進路状況（四大56%）2020年3月

教員への依存傾向がみられ、受動から能動への切り替えがうまくできない生徒が増えている。探究活動を重視し、海外交流事業など多様なプログラムを用意。

4　これからの高等学校教育で思うこと

この13年間、校長として4校の教育活動に係わってきました。4校は地域性も異なり、多様な生徒の言動や保護者の要望、教職員との考えの相違から学んだことは数知れません。どの生徒も自分の将来を思い描いていますが、目の前のことに追われ、時間だけが過ぎ、行動に移せない生徒が多くいます。未知のことに挑戦することへの恐れからかもしれません。高等学校では2022年度から新学習指導要領による教育活動が始まります。「新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実」がかかげられ、「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」のトライアングルによる「何ができるようになるか」が骨格となります。新たに「総合的な探究の時間」が設けられ、教職員がどう生徒と向き合っていくのかが問われています。

校長として、生徒や自校のあるべき教育への思いの具現化のため、自校の強みや弱点の分析、国や教育委員会の動向も踏まえての中長期的な方向性（指針）の策定をし、学校運営の最高責任者として、教職員を巻き込みながら「チーム」としての様々な取組をしてきました。校長の守備範囲が年々広くなっており、信頼できる助言者・相談者としての外部機関（コンサル）との連携の必要性を感じ、これまでもいろいろな外部の方と関わってきました。しかし、外部の力が学校運営の弾みとなって、うまくいくばかりではありません。様々な経緯があって、今の学校が成り立っています。学校経営の手法も校長の手腕となります。外部団体の考え方が自校の教育活動に適合していると考えれば進めるべきでしょう。そのためにも、校長自身が、どのような支援ができる団体なのか、どのような成果を期待できるのかを知ることが大切です。導入にはトップダウンで行うこともありますが、ボトムアップで裾野から広げていくという視点も必要です。

一方で出口の課題として高大接続改革の議論があり、「高校の質保証」など常に高校教育の改善が求められています。「大学入試が変われば、高校教育が変わる」とも言われますが、大学入試も高校入試と同様に「適格者主義」から「学ぶ意欲と熱意のある者の入学」となってきており、学力のみを問う時代から変わってきていると感じています。高校では、まもなく新学習指導要領に基づく教育が始まります。高校も目の前の生徒をどのように育てていくのか、学校ごとに地域や生徒・保護者から求められているものが違います。その実現のために数年で成果を上げようと努力している校長がいる一方、短期間では解決できない課題に対して苦しんでいる校長もいます。広域の通信制高校への進学希望者が増加しているように、教育の流れは「集団」から「個」、「同質性」から「多様性」への転換期となりつつあります。これまでの「集団」「同質性」による高校教育という概念は古いのでしょうか。時代にあった教育（社会の要請による教育）を推進することも必要ですが、その一方で、高校教育で大切にしてきた部活動などの集団活動（人間性の涵養：コミュニケーション力に起因するもの）の部分も重要だと考えます。大学での教育はどうなのでしょうか。高校教育の改革は誰のためなのでしょうか。

高等学校の存在意義が改めて問われていますが、高校教育は今の時代に生きる、将来の日本を支えていく若者のために、「予測困難な時代を生き抜き、豊かな知性・教養、健やかにして自律した個性をもつ、国際社会で活躍できる調和のとれた人間」を育てるためにあるべきで、コロナ禍によって学校教育環境は新たな段階を迎えています。真の「生徒」を主語とした教育活動にするためには、改革や改善を図ることは必要かもしれませんが、常に地に足の着いた高等学校としての自校の教育活動を見つめ、学校運営に当たることが最善だと思います。

（2021年12月記）

ローカルスタンダードの途次

服部 滋樹
graf代表　クリエイティブディレクター　京都芸術大学　教授

随分とこの道のりを歩いてきたように思う。
311以降、いや、その以前からだったかも知れない。時代禍中の中心があって、その他周辺に点在する価値。
現在、20世紀デザインが行ってきた反対側を求められ突き進んでいる。
各地の生活が変わったのか？と言うと大きく変化したとは、まだ思えないのだが、確実に価値のある方向へと進んでいるように思う。
消費はするが、吟味する。作り手の顔や手法。購入する意味。活動する意味。誰が幸せになるのか？それぞれに考え、価値を探り選択している。
その基準とは何なのか？
持続するであろう気配に支持をし、健やかであり、はつらつとした姿が想像できる部分を探っている。かけがえのない体験を探しているようでもある。

地域で自治体の方々とブランディングを行っているが、これも他とは違う体験の質を追い求め、その体験を設計に盛り込んで計画を進めていく。本質をリサーチによって見いだし、違いは何か？を整理していくのだが、そこに暮らす人々との対話やインタビューを行っていく内に明らかになっていくことがある。私たちは、幸いなことに百年前位の姿は口伝えに、聞くことが出来る。先々代はこの技術を残したかった、とか自生していた植物の話など気候が変わっても、その土地の地形に育ってきた植生と共にあった技術。技術は暮らしを支え、産業となり地域が生まれた。今、地形を目の前にしながら重層する歴史を想像し、これから継承されるべき事とは何なのか？を見いだしていく。

この方法論はローカルスタンダードと銘打った頃から少しづつ立ち上がってきてデザインリサーチの方法論とし次へと向かう。僕らは以下の様なフェーズ（※1）で展開をしてきている。1ー5までのフェーズを越えてデザインアウトプットされるのだが。1, 2は過去のリサーチと検証作業になる。その地域の歴史や先に述べた地形から生まれてきたコミュニティーの存在等。その後3の段階

で、この先を想像しやっとクリエイティブな思考が働き出す。ここまで継承されてきた理由や、途絶えた過去もヒントとなり先を考える事が出来る。30年後どうなっているか？100年後他と、どの様な影響をしあっているか？を検討し今を作っていく。
デザインはマーケティングをベースに作りすぎてきたのではないだろうか。消費を対象にしながらアウトプットされ、世に出た以降に広告宣伝し促していく。
21世紀の初頭に私たちは今世紀の価値を見いだすタイミングに立たされている。
作られ方を見直し、生まれてきた物や事を育んでいく。
そんな価値再生から考え直さなくてはならない。
地域に暮らす人々もまた消費者であり、その作り手もまた消費者である。
この壮大な環境を前に、共に良き生活者として、共創する社会を地域から。

※1

Design-related Researching

hattori studio

DESIGN：リサーチ→スタディ→アウトプット→未来

Research is：文献/インタビュー/フィールドワーク/地質学/土地の調査/比較/歴史検証/民族学/社会学/アートフォーム/仮説

Research method：調査→検証→解体→編集→再構築

1	2	3	4	5
地形・郷土・風土・伝承 土地に根ざした理由を見いだす。	継承された理由はなぜか？	現在の状況から未来を想定し、問題を検証する。	仮説 スタディ 仮説	アウトプット フィニッシュ プレゼンテーション
なぜ、そこに生まれたのか？ なぜ、その技術が生まれたのか？ 環境や風土に応じた、技術が生まれ息づいているはずだ。	歴史が変化し、更新され、進化する理由。	10年から30年後の未来を想定してください。	未来へ受け継ぐために、仮説として組み立て検討を繰り返しましょう。	調査によって発見されたエピソードを注意深く検証し、発表へと導きます。 研究によって見いだした事柄やエピソードは、明快な解答と同様に重要です。

話しやすさとはなにか —— 2013〜2021年の振り返り

馬場 智一
長野県立大学グローバルマネジメント学部准教授

UTCPで哲学対話と出会ってから8年が経ちました。UTCPを「卒業」後、長野県の短大に赴任し、そこが四年制大学へ改組されました。その間哲学カフェを始め、短大・大学の授業で対話を実践しました。中学、高校や生涯教育の場でも哲学対話を実践するようになりました。2022年4月に開学する大学院では、社会的企業家を目指す人のための哲学対話を行う予定で、現在その準備をしています。

2013年UTCPで開催された「母」を巡る哲学対話に参加した時、「何を言ってもよい場」の居心地の良さを久々に味わい、直感的に「これだ！」と思いました。子供のころは（四人兄弟＋両親祖父母＋飼い犬の）夕食の団らんの後の「お茶のみ」が、思ったこと考えたことを何でも言う場で、今振り返れば哲学対話のようなものでした。人間の生活の中には、そういう場、時間が必要なのだと思います。自分でもそれを作ろうと、この4年間いろんな試みを行いました。

仲間と共同で運営している「権堂哲学カフェ」（「ごんてつ」）は、その中心的な舞台です。「ごんてつ」は、私にとって仕事場でも家庭でもない、いわゆるサードプレイスです。そこでしか出会えない人々とたくさん出会ってきた貴重な場所です。常連さんもたくさんいらっしゃいますが、おそらく彼女ら彼らにとってもそうなのだと思います（だといいです）。

哲学カフェのような場の醍醐味は、自分自身の物の見方が変わったり広がったりして、それまでよりも少し自由になるところ、なんとなく「スッキリ」するところだと思っています。しかしそれも、言葉のやり取りがないと生じません。だから、「話しやすい」ことは、哲学対話にとって必須の条件です。「何を言ってもよい」「頭ごなしに否定しない」といったルールや心構えを共有することは、この点でとても有効で、私も哲学カフェや授業で大いに使っています。

それでも参加者から自由に意見や質問が出て、対話が深まっていくことは、それほど簡単ではありません。これまで私が行ってきた哲学対話の活動（哲学カフェ、大学での授業、出前授業、教員研修など）では、自由に意見が出たり、質問が活発に交わされたりするための工夫を試みてきました。振り返ると、その工夫には二種類あって、両方とも頭や心を「ほぐす」ことに主眼があるように思

えます。

哲学対話はしばしばスポーツに喩えられます。私は中学・高校と柔道部だったので、柔道のイメージなのですが、対話の中で、ある質問によってそれまでの対話の流れがガラっと変わったり、誰も気づいていなかった観点が示されたりするときの瞬間は、技が綺麗に決まった瞬間に似ています（勝敗が決まる点は似ていません）。柔道の場合、相手の体重移動を利用して投げます。相手が止まっている状態で投げることはできないので、相手を動かします。お互いに動いている状態が、技が決まる前提条件です。

哲学対話では、意見や質問が出ている状態がこれに相当します。この状態になるためには、参加者の気持ちと頭脳の両方がほぐれている必要があります。気持ちがほぐれていないと、本当に思っていることを言えなかったり、自分の意見に固執したり、他人の意見を聞くことができなかったりします。頭がほぐれていないと、質問がなかなか出てこなかったり、狭い視野から抜け出せなかったり、豊富な経験があるのに思い出せなかったりします。心がほぐれてくると頭もほぐれたり、頭がほぐれると心もほぐれたり、両者は相関関係にあります。

工夫の一つ目ですが、コロナ禍では、屋内の対話がやりにくくなりました。2020年の夏から、「ごんてつ」では、野外を歩きながら対話する「ウォーキング哲学対話」を実践してきました。テーマや問いを決めておいた上で、2〜3人に分かれ、歩きながら話します。しばらくしたらメンバーチェンジをして、最終的には全員が全員と話せるようにします。野外を歩くと様々な風景が目に入り、日差し、風、におい、音、生き物、地面の凹凸、ありとあらゆる刺激を受けます。しゃべることにも聞くことにも集中できず、気が散るのですが、逆に沈黙も気にならず、また少人数に分かれているので、その分気楽です。気が散るので、あまり枝葉末節の事柄に拘る余裕がなくなり、自分の意見や尋ねたいことの本質的な部分だけが意識に残りやすくなります。一概には言えませんが、おおよそそんな傾向が見られます。

また、四方を壁で囲まれた空間に比べると、野外には空間を遮るものはありません。周囲に壁があると心にも壁ができるようです。逆に壁のない空間で、しかもそこはすでに世界の中の様々な存在（木、花、雲、小川、道、階段、車、家、公共の建築物、畑、通行人等など）で満たされていて、自分もその内の一つ、one of themに過ぎない存在になっていると、心も開くようです。これは、短大の授業で、天気が良い日にキャンパスの隣の公園に出て対話をしたとき、学生の様子から気づかされました。自分自身も、記憶をたどると、たしかに野外で何かをしながらだと（例えばハイキング、草取り）、お喋りは結構弾んだなということが思い出されます。ただし、「哲学対話」にするために、歩いた後の振り返りの時間

を設けるなど、少し意識的に対話を構成する必要はあります。

もう一つの工夫は、ゲームです。短大の授業で「共通教養演習」という1年生後半の選択の教養科目がありました。10名ほどの教員で担当し、学生は各自好きなゼミを選びます。私のゼミは「哲学対話」だけをしていました。ある同僚の先生は「ゲーミフィケーション」をテーマにしていました。勉強や掃除のようなあまりやる気のしないものを、ゲーム化して楽しくやってしまおうというものです。

この発想を頂き、哲学対話もゲームにしてみようと考えました。ただし、問いを立てて対話するという部分をゲームにするわけではありません。質問をするとか、接続詞を使うとか、問いを立てるとか、哲学対話のなかの様々な言葉を使った行為を分解して、ゲームを作りました。質問ゲームはすでによく紹介され、自分でもよく使うゲームでしたので、それ以外の種類を作り、いま20種類くらいあります。

接続詞ゲームの一例を紹介します。4人ごとにグループに分かれます。起床順に1〜4の番号をグループメンバーに割り振ります。1番はその日の対話のテーマとなる言葉を言います。例えば「勉強」。2番はそこに述語を加えて一つの文にします(「勉強は退屈だ」)。3番は指定された接続詞と主語を言います(「しかし遊びは」)。4番は、そこに述語を加えます(「しかし遊びは楽しい」)。途中で難しくなったらみんなで考えたり、2番まで巻き戻して、作り直したりします。

このようなゲームを授業のディスカッションの時間、哲学カフェの冒頭などに使っています。最初頭をほぐすという目的で作ったものですが、みんなで協力して文を作るので、心もほぐれていき、チーム感が出てきます。その意味ではこれも、頭と心両方をほぐす効果があります。

二つの工夫は、簡単にいえばアイスブレイクの効果があります。初対面かつ年齢や職業も異なる人が集う哲学カフェでも、年齢がほぼ同じ人しかいない学校でもアイスブレイクは必要です。「アイスがブレイク」されるとなにが出てくるのでしょうか？上述のように、意見や質問が出てきます。では、それを通じて何が現れるのでしょうか？それは、差異です。質問は分からないことがあるからします。分からないことは、質問する人とされる人の間の一つの差異です。一見同質的な集団に見える生徒や学生も、実は、それぞれ様々なバックグラウンドを持った、互いに異なった人々です。「なんでそう思ったの？」「それってどういう意味ですか？」という単純な質問は、差異を前提にして生まれ、その質問が、出発点となった問いから対話を先に進めます。差異を燃料や材料に、みんなで対話を作ってゆくことで、探求のコミュニティができると私は考えています。私はしばしばこのコミュニティを、行先が決まっていないままジャングルのなかを進む探検隊に喩えます。

探検は、お互いに話しやすい関係性の中でこそ可能です。なんでも言ってよ

いという対話の場をUTCPで久々に経験したとき、これだ！と思ったのは、そうした場が、私の生活の中にはほとんどなくなっていたからだと思います。人の集まりというものは、往々にして一つの目標や目的の元に成立します。共有された同じ目的によって、そこに集う人に役割や機能が割り振られてゆくと、その人自身がどういう人かは重要ではなくなります。経済成長や、効率性を最優先の課題とする社会では、こうした集団が増え、差異を燃料にした探検隊、人が自分自身でいられるコミュニティはどんどんなくなっていくように思えます。でも、そうした場所が欲しいという人々のニーズはなくなりません。学校や職場といった壁に囲まれた集団へと、私たちはいつのまにか放り込まれています。哲学対話のような場は、こうした見えない壁を壊し、社会を作り変えることができると、この8年の活動で私は確信するようになりました。野外を歩いたり、対話ゲームをすることは、壁を壊して社会の風通しを良くする活動の一環です。

4つの思考を考える

早川 克美
京都芸術大学 教授、デザイナー

今、ビジネスの現場において、創造的な思考能力が注目されている。

経済産業省と特許庁が2018年に発表した政策提言「『デザイン経営』宣言」の冒頭では、「『デザイン経営』は、ブランドとイノベーションを通じて、企業の産業競争力の向上に寄与する」と述べられ、デザイナーの思考法をかなりかみ砕いて説明することで、経営者にも、一般のビジネスパーソンにもデザインマインドを持ってもらいたいと表している。ここでいうデザインマインドとは、創造性に内包される概念だろう。また、創造的思考の方法論とされる「デザイン思考」や「アート思考」でウェブ検索すれば、その名を冠するセミナーや講習会が雨後の竹の子のごとく開催されている。

ではなぜ、社会は創造的な思考能力を求めているのか。

21世紀となり、社会の問題が一層複雑化し、企業が世界で戦える競争力を持つには、「やはり誰もやっていないことに挑戦していくしかない。前例のない、新しいものを創造する必要がある」というムードが社会を占めるようになってきていた。そして、データが導き出す正解だけでは、新たな価値を創造できないことが、だんだん気づかれつつあった。そこで、知識や生産性に代わる資源として見いだされ求められたのが、「創造性」だった。人間の本来持っている能力である「創造性」をいかに育み、活用していったらいいのか、に関心が集まるようになり、創造的思考能力が注目されるようになったのだ。

創造的思考能力は、現在、興味深いことに、「ー思考」と名付けられて、ある種の流派のように扱われている。流派なので、自分たちの提唱する思考が優れていると主張する。もちろん相互に関連付けられることは少ない。「ー思考」にはどういうものがあるかといえば、「デザイン思考」、「アート思考」、最近では「哲学的思考」も登場している。そしてそこに、いやいや、やはり「論理的思考」だと

立ちはだかる。本稿では、やや、混乱の様相を示している「ー思考」と名付けられたこれら4つ思考を整理してみたい。その上で、これらの関係性について言及してみたい。

論理的思考とは、効率を重んじつつ、1つの正解を理論立ててみつけていく思考だ。前例から得た知見を重視し、データを分析して結果を導き出そうとする思考であり、積み上げ式の理屈で失敗の少ない確実な方法といえる。しかし一方で、潜在的な課題を見逃してしまったり、少数項を切り捨ててしまったりする側面がある。そのため、より複雑化する現代の社会問題を解決するには限界があるといわれるようになってきた。

その見えない課題を掘り起こし、目に見える課題にして、それに共感することで潜在的なニーズまでをも発見していくのが「デザイン思考」だ。「創造性」に働きかけるための方法論、創造性を活用するための方法論ともいえるだろう。デザイン思考は、デザイナーがデザインをしていく際の思考のプロセス、つまり、専門性としてのデザインの方法論を、一般の人が使いやすいように形式知として示したものだ。デザイン思考は、複数の人の間で共有しやすいことから、多くの人を議論の土俵に巻き込むことが可能だ。したがって、人間の創造性を解放するための、考えるためのインフラまたはアプリケーションであり、チームワークによる共創に適した方法だとされている。そのため、近年、多くの企業などで採用されつつあるのだ。論理的思考が効率的な机上で行われる思考方法だとしたら、デザイン思考はユーザーに寄り添い共感することで問いを立て解を見つけていく無駄も多い身体的な体験を伴うともいえるだろう。

しかし、ではデザイン思考を用いたらすべて創造的に解決できるのだろうか？といえば、実のところ、そうともいえない。デザイン思考は、まず、ユーザーを観察して、エスノグラフィー（行動観察）的に情報を集めていく。そして、集まった膨大な情報から、手がかりを見つけていく際に求められる発見力や、ユーザーに共感する鋭敏な感受性は、一個人の持っている能力に負うところが大きい。

そう、デザイン思考はそんなに簡単ではないのだ。

また、「デザイン思考でなんでも解決できる」と期待していたのに、どうもそうでもないみたいだと、その限界に気づいた声も聞かれるようになってきている。デザイン思考は、共感からスタートするため、漸進的な創造になりやすく、

急進的な創造には向いていないということも限界論の理由になっている。こうした限界を説く敏感な人たちが

「『デザイン思考』ではない、『アート思考』だ」

と言い始めたのではないか、というのが「アート思考」が登場した理由、私の見立てだ。

ただ、アート思考は、論理的思考やデザイン思考のように形式化された明確な方法論ではなく、たとえば「いままでになかったものを創造することがアート思考だ」「個人の内なる感性からイメージしていくことだ」など、人によって解釈が様々で若干混乱の様相を示している。私としては、「個人の内に秘めた価値観や衝動から創造していくこと」、言い換えれば「自分軸を起点に創造する」という行為をアート思考と理解している。こう捉えると、アート思考とは特別な思考ではなく、創造する際の根本的な、とてもベーシックなあり方といえるのではないだろうか。

さあ、そこにやや斜め上空から「哲学的思考」が登場する。

「哲学的に考える」とは、「そもそも、それは何だったのか」を考えることだ。生きることの本質とは何か？といったように、身の回りの物事の本質を問い、当たり前と思われていることを、まずは疑ってみることから「哲学」は始まる。そして、視野を広げ、深め、新しい常識を見つけることが「哲学的に考える」ことの根本であり、同じ問いを共有する人たちと対話し、自分たちの経験に根ざした意味を掘り起こしながら、「それが確かに物事の本質かもしれない」という互いに納得できる共通理解に到達することが「本質をとらえる＝哲学的思考」ということだろう。

4つの思考、比較してどれが良い、という議論はまったく無駄である。どれが優れているというものではなく、創造的思考の中心にデザイン思考を置きつつ、

「共創に参加する個人の内面の基本的なあり方としてアート思考が必要」
「問題の本質を洞察し、理解するためには哲学的思考が必要」
「ユーザーに寄り添うためにはデザイン思考が必要」
「デザイン思考におけるバックデータ、理論構築として論理的思考は必要」

というような随所に補完し合う関係性ではないかと考えている。4つの思考は、アート思考で個人の自分軸を確立した上で、哲学的思考で本質を洞察し、デザイン思考でユーザーに寄り添い、理論構築を論理的思考でまとめる、というような複合的な関係が望ましいのではないだろうか。

論理的、デザイン、アート、哲学的と、物事に対する捉え方が、どんどんとマクロからミクロにフォーカスするようになったことは、創造する社会に向けて、歓迎すべきことだと思う。4つの思考のどれが優れているというのではなく、課題や求められた状況で適宜選択し、あるいは段階に応じて組み合わせたりして使いこなしていくものだろう。そう複合していくことで、多様で複雑な社会に対し、可能な限り切り捨てることなく、私たちがていねいに向き合えるようになるのではないかと期待したい。

明らかに違う ～ 日本で障害をもった外国人であること

Michael Gillan Peckitt
哲学者、同志社大学・神戸市外国語大学非常勤講師

「私には同時に自由の新しい感覚もあった。訪問者は自分の国の慣習にもはや縛られず、日本の慣習も無視することができた。何も知らない“外人”ということで例外扱いされたからである。この自由には、自分以外のすべてのものを見出す究極の自由も含まれていた。通りを下りながら、彼は明らかに違った存在であるという自由を享受した」（Richie, D (2011) ‘Intimacy and Distance: On Being a Foreigner in Japan’ from Viewed Sideways: Writings on Culture and Style in Contemporary Japan. Stone Bridge Press）

この引用のなかで、有名なジャーナリストで日本通であったドナルド・リチーは、非日本人が日本で生活することのパラドクスについて述べている。日本人ではないということで、ある種の自由がいかにいろんな仕方で経験できるかを書いているのだ。日本人が社会から期待されることに、外国人は必ずしも合わせなくてもいい。だからリチーが述べているように、「明らかに違う」ということから来る自由があり、私自身日本に暮らす非日本人として、彼が言っているようなことを私も部分的には経験したことがある。しかし、私の場合、事情はもっと複雑で微妙なものを含んでいる。というのも、私は日本で暮らす非日本人であることに加え、身体に障害をもっているからである。この短いエッセイで、日本での生活で経験したことについて、ポジティヴなこともネガティヴなことも書いていこうと思う。それで日本人が身体に障害をもった人とどのようにして「インクルーシヴ」であろうとしているのか考えてみたい。

「明らかに違う」

イギリスで私はいつも、自分がはみ出し者だと感じていた。とくに差別を受けていたというわけではない。少なくとも個人的にはそうだ。しかし、手加減してもらわないといけない存在であるといつも感じていた。つまずいたりよろめいたりすると、人は自分のせいだというふうに謝罪してくるし、私が歩くのに

「じゃまになった」と思うと謝る。普通なら、最悪無礼な振る舞いとされている行動が、障害者の行動となる。例えば、私がバスに乗ると、おせっかいなおばあさんやお母さんは、自分の子どもに席を空けさせるのだが、たいていの場合、「ほら、体の不自由な人を座らせてあげなさい！」と大声で言うのだ。もちろん良かれと思ってのことなので、私としては、とくにその親切な行為にケチをつけるつもりはない。とはいえ、私を助けるさい、私の障害を世間に知らしめることが多く、それどころかそうしないといけないかのようなことさえあるし、しばらくすると、気に障るようになる。良きサマリア人のことを忘れてはいけないが、30年以上もそんな経験をしていると、忘れないようにするのもしんどくなってくる。

日本ではそんなことはない。もちろん、日本には私のことを障害者とは思わない人がいるとか、私の障害に気をつかわない人がいると言いたいわけでははい。日本に初めて来たとき、あることにすぐ気がついた——私の障害に対する日本での見方は、イギリスと同じではないように見えたのだ。確かに私の障害に言及する人はいなかった。もちろんそれに気づいてはいるし、だから優先席を譲ってくれる人もいる。それでも私の障害は、いろんな仕方で背景にとどまっている。私が日本人ではないということのほうがずっと目立つ特徴となって、私の障害のほうは目立たなくなるのである。

しかし、日本で外国人が暮らすのは、時にある種の交渉である。実際身体的にも精神的にも、横断しないといけない領域がある。自分の素性のことで交渉しないといけない——私の場合、少なくとも、自分はBritishであってEnglishではないと日々主張しないといけない（日本人でBritishという言葉が分かる人はめったにいない）だけではない。身の置き場についても交渉しないといけない。障害のある外国人にとっては、身の回りの環境を安心して交渉しないといけないが、それはきわめて重要なのだが、必ずしも容易ではない。

身体的な障害をもって日本で生活する外国人として私は、日本の鉄道の駅を見ると、日本が障害者にとってどれくらい暮らしやすいかよく分かるいい例だとしばしば思う。身の回りの環境について安心して交渉しようとする時にしばしばもっとも大きな困難を感じるのが、移動しようとする障害者なのである。

優先席

日本の優先席（priority seat）をご存じない方のために言っておくが、これは障害者、高齢者、妊婦、乳幼児を連れた人のための席で、通常は各車両の端にある数席が割りあてられている。実際、こうした人たちのために席を譲る人も多い。優先席に座らない、もしくは座れない場合は、人々はその前にただ立っている。

これは(誤って)マナーにかなったことだと思われている。結局のところその人は優先席に座っていないのだから。

しかしながら、障害をもつ人間として指摘しておきたいのだが、これでは優先席に近付くことができず、それを必要とする人が座るのを妨げていることになる。障害をもつ人にとっては、乗車する前にすでに障壁がある。例えば、日本の駅のエスカレーターは、片側が立ち止まって乗る人のためで、もう片側が歩いていく人のためである。東京では左側が立ち止まる人、右側が歩いていく人のためだが、大阪ではマナーが逆になっていて、右側が立ち止まる人、左側が急いで歩いていく人のためである。しかしそのせいで、障害をもつ人はエスカレーターが使いにくくなってしまう。とくにラッシュ時の駅はそうである。

障害をもつ人が出会うこうした困難を解消するために、埼玉県は「乗客はエスカレーターは立ち止まって使い、鉄道会社にはこのような適切な利用法を呼びかける」よう求める条例を定めた。埼玉でも関西でも、JRの各駅では、「歩かずに立ち止まろう！　エスカレーターの新しい使い方」とうたうキャンペーンを行って周知を図っているが、多くの人が守っていない。

無人駅で

障害をもった人が駅で直面する問題は、日本で無人駅がどんどん増えていることである。そこには駅員がおらず、そのために障害をもった人が生きづらくなる。例えば、車いすの人は介助なしには乗車できない。実際、全国の駅のおよそ半分に当たる4500の駅は無人になっていて、その数は増え続けている。

日本における障害者の権利保護団体の報告によると、無人駅で介助を希望しても、数日前までに予約をする必要があるため、実際にそうしてもらうのは難しいし、連絡しても断られる場合もあるという。それで障害をもった人で旅行しようとするする人も多いので、できるだけ多くの駅員を配置してほしいという意見も表明された。

結論

このエッセイの冒頭で私は、日本が障害をもった人にとってどれくらい暮らしやすいかということを考えるうえで、電車の駅がいい事例になると述べた。その点で日本に提言したいことはいろいろある。いろんなところに優先席があるという点では、日本は私の故郷であるイギリスよりも暮らしやすい。しかし他方で、暮らしにくい面もある。日本を暮しにくくしている原因は、便利さとスピードを追い求める傾向にあると、私は感じている。それを如実に示している

のが、無人駅の増加である。鉄道会社が障害をもった人の暮らしを難しくしようとしているわけではなく、しばしば日本の社会全体がそうしているのだ。おそらく、もし日本社会がスローダウンして、便利さと速さを今ほど優先しなければ、よりインクルーシヴになるだろう。

（梶谷真司訳）

子連れ大学院生活

～母になっても自分の人生を諦めない、自分らしい選択を～

藤原　雪
オンライン×リアルの居場所づくり実現に向けて活動中

結婚や妊娠・出産は自分のことを犠牲にして「不自由になること」だと思っていた。夫や子どもに縛られて、自分の時間やお金がなくなり、仕事や学業など人生が制限されるというイメージしか持てなかった。周りの友人が「結婚したい」「子どもがほしい」と言っているのを私は全く理解ができなかった。結婚や妊娠・出産は自分には関係のないことだと思っていた。しかし、それらは思っていたよりも早く訪れることになった。

1　大学卒業間近に妊娠発覚～妊娠継続と進路の葛藤

大学4年生の時に以前付き合っていた男性と復縁してすぐに妊娠が発覚した。卒業間近の妊娠だったため、大学生活に特に支障はなかったが、4月からは他県の大学院進学を予定していた。そのため、妊娠がわかった時は嬉しいという気持ちはなく、今後のことを考えると戸惑いや不安を感じた。彼も妊娠を喜んでくれなかった。妊娠した時点で「子どもを堕ろして大学院を続ける」「大学院進学を辞退or休学し子どもを生む」という二つの選択肢が自然と浮かんだ。学生で妊娠した場合は、子どもと学びのどちらかを諦めなければならないと思っていた。だけど、私はどちらも諦めたくはなかった。どちらかの選択をしても後悔が残ると思ったのだ。だから、私は新たな道を模索し始めた。

2　子連れ大学院生活スタート～自分（たち）で環境を創っていく

結局私は妊娠を継続し、大学院にも進学をした。悪阻に悩まされながら送る大学院生活は想像していたよりも辛かったが、何とか乗り切ることができた。問題は、子どもが生まれてから大学院生活をどうするか、だった。私の出産は10月で後期の授業が始まるタイミングだったため、お休みすることができなかった。保育園は最短で産後57日目からしか預けることはできない。そもそも0歳児の途中入園は難しいだけではなく、学生であるため優先順位が低く、子どもを預けることができなかった。金銭的にも0歳児保育は高く、大学院生の私には預ける余裕がなかった。そのため、最初は母に預けて大学院生活を継続しようと

したが、母にも母の生活があるため、新たな方法を模索しなければならなかった。そこで、大学の先生に相談をし、オンラインでの授業参加をお願いした。今では当たり前になったオンライン授業も当時は当たり前ではなかった。産後すぐはオンラインで授業に参加させてもらったり、子どもと一緒に授業を受けさせてもらった。幸いにも私の通っていた大学の先生たちは私の子連れ大学院生活を応援してくれた。使っていないジョイントマットを分けてくれたり、大学院の一室にキッズスペースを作ることも承諾してくれた。子どもを連れて学生で満員になるバスに乗ることが大変だったため、車で大学に行く事を許可してもらった。

子どもがハイハイし始めると、子どもと一緒に授業を受けることが難しくなってきた。大学院の同級生が授業の被っていない時間に子どもを見てくれたが、同級生の負担が大きくなってしまうと思い、大学内で託児ボランティアを募集することにした。学校中にチラシを貼り、連絡を待っていると、すぐに1人の学生さんが連絡をしてくれた。最初に託児ボランティアさんは保育園でアルバイトをしている子どもが好きな学生さんだった。そこから卒業する頃には11名ものボランティアさんが集まってくれた。託児ボランティアに応募してくれた理由を聞いてみると、「小さい子どもが好き」「自分がママになったときのために子どもとの接し方を学んでおきたい」など様々な思いでボランティアに参加してくれた。同級生やボランティアさんに子どもを見てもらうことに申し訳なさを感じることもあったが、「あまり赤ちゃんと触れ合う機会がないから触れ合うことができてよかった」「子どもがいる友人の気持ちがわかった」「妊娠中から産後まで身近でママさんの頑張る姿を見ることができて、自分がパパになったときはちゃんと支えようと思った」「子どもの成長を一緒に見守ることができて良かった」など、たくさんの嬉しい言葉をいただいた。

子どもの成長に合わせて様々な課題が出てきたが、何とか乗り越え大学院生活を送っていた。しかし、大学院生活も終盤に近づいてきた頃にある問題が出てきた。

3　子連れ大学院生活という選択は私の「ワガママ」？～子どもの成長を見ることができるのは今しかないというけれど

大学院の一室をキッズスペースとして使用していたが、元々院生部屋は二部屋しかなかったため、修士論文の提出が近づくと、場所が狭くなってしまい、他の学生の学びを妨げてしまう、ということが起こった。私が子どもを連れて大学院生活を続けるという選択をすることで、周りの人々に迷惑をかけてしまう

のだ。この時私の「大学院で学びたい」という思いはワガママになるのか、と頭を悩ませることとなった。

周りの人々からも「子どもが落ち着いてからでいいんじゃない？」「今はゆっりしたら？」「子どもの成長を見れるのは今しかないから」と言われることもあった。私のことを気遣っての言葉ではあったのだろうが、遠回しに「子どもがかわいそう」「今は子育てに専念すべきだ」「子どもを連れて大学に来るのは迷惑だ」と言われているように感じた。今まさに妊娠・出産、育児、結婚、離婚を経験しているからこそわかること、感じること、考えること、今の私でないと表現できないことがある。実際に子連れ大学院生活を終えて2年経った今では当時の思いを書き起こすことは難しくなっている。大学院の間に結婚、出産、離婚を経験し、心も身体も不安定な中で初めての育児に戸惑い、夜泣きにも悩まされ、心身ともにギリギリになりながらも研究を続けていた当時の心境を忘れかけている。休学していたら私は大学院生活を続けようという気力を保てなかっただろう。

子どもの今が今しかないようにママさんたちの今、私という存在の今も今しかないのだ。「子どもができたから」「子どもを連れて行く環境がないから」と自分の人生を諦めていたら私は今頃その選択を後悔していただろう。

ママになった時点で子どもや夫、家族のために自分のことを後回しにしてしまう人も多い。自分のやりたいこと、夢や目標は後回しにしてしまうのだ。女性が子どもや夫、家族に合わせて生きることが当たり前となっている。父親が外で働くことは当たり前なのに、母親が働こうとすると、夫にお伺いを立てないといけない。女性が働くことや自己実現をすることは「ワガママ」になってしまうのだ。働く母親も多くなってきたが、結局は「家事育児を疎かにしない限りで」という条件付きで、職種、働き方など制限がある。「夫が働くのを嫌がる」「夫が家のことを何もしないし、家事育児、仕事を両立する自信がない」という家庭内でのジェンダーの問題や「そもそも小さい子どもがいると、なかなか雇ってもらえない」という現実がある。社会の中では妊娠した女性や子どものいる女性が差別や排除を受ける場面が未だに多い。

4　ママになっても自分らしく生きる～ママになったからこそできることを模索して

大学院生活も終わりに近付いてきた頃、私は就職活動をはじめた。シングル

マザーであることを告げると、「残業はできますか？」「子どもを見ていてくれる人はいますか？」「再婚の予定は？」などと聞かれ、なかなか採用が決まらず、面接の度に不快な思いをした。結局最後まで就職先が見つからず、知り合いの紹介で現在の仕事に就いた。子どもがいてフルタイムで働くのは大変で、子どものお迎えの電話は頻繁にあるし、社会人1年目の時は子どもが入院して、多くの人に頭を下げてお仕事をお休みしなければならなかった。予定のキャンセルの電話を入れる度に胃が痛くなり、相手にどんな反応をされるのか、不安な思いで対応していた。このようなことを繰り返していくと、「働きたい」という思いすら奪われていく。ママが働き続けることの難しさを日々痛感している。現在2人目が生まれ、より一層フルタイムで働くことが難しいと感じ、新たな働き方を模索して日々活動をしている。

子連れで大学院に通っていたときも自分のため、ということももちろんあるけれど、将来同じように学生で妊娠をした人たちが学びと子ども、どちらかを諦めなくても良いように新たな道を作りたかったのだ。周りの人、社会はすぐには変わらない。だったら自分が変わるしかない。私たち自身が「ママになったから仕方ない」と諦めてしまったら、私たちの人生は変わらないし、社会も変わらない。私たちの感じる生きづらさを言葉にする。前例や環境がないなら自分で、自分たちで作っていく。それが当たり前にとらわれず、自分らしく生きていくために大切なことだと思っている。

多くの人に支えられながらも子どもと一緒に大学院生活を送ることのできた2年間は今でも私の宝物だ。現在はパートナーとの間に子どもが生まれ、2児のママとなったが、これからも「小さい子どもがいるから」「ママになったから」と自分の人生を規定せずに、どんどん新しいことに挑戦していこうと思う。ママになったからこそできることもたくさんあると信じて。

哲学の二面性を救い出す：哲学と哲学プラクティス

堀越　耀介
東京大学共生のための国際哲学研究センター（UTCP）特任研究員

「哲学とは何か」という問いにこたえること自体、哲学の背負う巨大な課題の一つであるといわれている。日常的な言葉の使用法も含めるなら、「哲学」という言葉の語感からくみ取られうる意味は、恐ろしいほど多様だ。むしろ「哲学」というとき、その内実がどのようなものであれ、「実践や生活とはかけ離れたもの」という、漠然とした消極的なイメージの方が共有されているようにさえ思える。

たしかに学問の一つとして、厳密な分析や記述、比較のもとに行われるのが、「哲学」と呼ばれるものの一側面であることは間違いない。実際、哲学は、「知るということを究極的に突き詰める愛」という強い表現でもって、伝統的に語られてきた。そして、こうした営みが、類まれな言語能力、表現力、読解力を持つ哲学者・研究者によって支えられてきたことは否定する余地がない。ここでいう「愛」というのも、限りなくそれに近づきたい、知りたいという強烈な欲求をしばしば含むものであり、真理へと向かう道筋や動機も並大抵ではない。そのため、こうした一部の人の持つ卓越的な能力と動機によって、「学問としての哲学」が維持される/ていくのは、紛れもない事実である。

他方で、まさにこの理由から、大多数にとって、哲学は「近づきがたい」、「関係ない」と感じられてしまう。しかし、いかに私たちの手の届かないところで「学問としての哲学」が積み上げられていようとも、まさに私たち自身の中に「哲学する」契機が潜んでいることに自覚的な人は、決して少なくないというのが、現在まで哲学プラクティスを実践してきた私自身の実感でもある。あるいは、はじめは自覚的でなかったとしても、自分自身の気づきや変容の中に、哲学する喜びを見出す人を大人・子ども問わず数多く見てきた。

私たち一人一人の中にある考えや気づき、経験をもとに、世界や現象、価値について語りあい、記述し、その是非について考えようとするのが、哲学プラクティスのエッセンスだといえるだろう。その意味で、哲学プラクティスは、私たち自身の手に、私たち自身のために、「哲学する営み」を取り戻そうとする「ムーブメント」であるという表現が、実にしっくりとくる。

ハワイの哲学プラクティス実践者で、特に「子どもとする哲学」の専門家であるトマス・ジャクソンは、「大文字の哲学（Big P）」と「小文字の哲学（Small P）」を区別する。「大文字の哲学」とは、いわゆる「アカデミア」で営まれる「学問としての哲学」であり、哲学の古典や論文にもとづいた「哲学研究」を指す。他方で、「小文字の哲学」とは、まさに私たち一人一人が「プライマル・ワンダー」、すなわち原初的な感覚にもとづいて「する哲学」にほかならない。

しばしば、私たちは「大文字の哲学」を前に、沈黙する。それはあまりに壮大、難解で、近づきがたい。もちろん、それを学んで自分の経験と比較し批判することができるなら、より「高度に」哲学することになるのかもしれない。しかし、残念ながら多くの人にとっては、その時間も、リソースもない。あるいは、「大文字の哲学」に貢献しようなどという動機もない。そこにはただ、私たち自身や世界について、自分たちで考え、話し合ってみたいという純粋な気持ち＝ワンダーがあるだけなのだから。このことを、たとえ不格好な仕方であっても、もっと直視していく必要があるのではないだろうか。

他方で、大文字の哲学は、「まずは自分自身の経験から考え始める」という仕方での、哲学の最初の一歩を踏み出そうとする動機をくじかせることすらある。もちろん、大文字の哲学に食らいついてまで知を追究したいのでなければ、それは「愛」とはいえない、「哲学」とは言えないという言い方もできるのかもしれない。

しかし哲学は、徹底的に民主的な理想に従うこともまた、同時に要請されているはずではないだろうか。ここで「民主的」とは、「多数決投票」を示す形容詞ではなく、すべての人の考えや意見が包摂され知られたうえで、特定の問題に向き合い、それについて熟慮すべきだという理念を表象する。

特定の観点や意見を検討しないまま議論するのであれば、それを考える上で役立つユニークで有用な観点を見過ごしてしまうかもしれない。そしてそれらは、原理的に言ってどんな人の中にもありうるし、また実際に存在する。従って、大文字の哲学は本来的に、可能な限りで多くの声を聴かなければならないだけでなく、そうすべきですらある。その意味で、私たちが大文字の哲学を前に、自分の中に芽生えている哲学的な関心を抑圧する必要は、一切ない。大文字の哲学と小文字の哲学は、相互補完的な関係にあるといってもいいだろう。

冒頭の「哲学とは何か」という問いには依然、答えられない。しかし、家のリビングで、街角で、学校で、会社で「哲学するとはどういうことか」と考え、対話してみることはできる。私たち一人一人の観点は、世界にとって、他者にとって有用でありうるし、社会を変革していく源にさえなることがある。なにより私たちは、人の意見を聞けば、たとえどれだけ少しであろうとも変わらずにはいられない。このことこそが、哲学が持つ最も根本的で、重要なパワーだといっても

いい。その意味で、哲学することは、時に社会や個人がその現状を維持しようとする力に対して抵抗する。

こうして私たちは、通常では考えられないほどオープンで自由な哲学の空間で、互いの実存を明かしあい、言葉を明晰にし、隠れた前提を検討していく。哲学的な対話を重ねる中で、私たちは、たしかに批判的な思考や、借りてきた偽りの言葉でなく自分の言葉で表現する力も身につける。

しかし、それはある意味では、副次的な帰結にすぎない。それよりも、他者や社会規範の中に埋もれている自分自身をサルベージし、そこから自由になること、自分の本心や未来を発見できることこそが真の成果であるようにおもう。まずは無目的に、こうした変容や探究それ自体を楽しむ、様々な規範やしがらみから自由になるということが哲学の最も核心的な部分であることは、何よりも強調したい、哲学することの特徴だといえる。

他方で、あくまで結果的にであるとはいえ、教育的な成果をもたらしたり、社会的問題解決に寄与したり、ビジネス・シーンでも機能したりする哲学の力に注目するのが、哲学プラクティスの興味深い点であるという言い方もできる。

哲学プラクティスの近年の潮流としてもっとも目を見張るのは、それが民間企業、ビジネスの領域でも活用されるようになってきたことかもしれない。哲学とビジネスといえば、一見、水と油のような関係にさえ思われる一方で、それがビジネス・シーンでも活用されるとすれば、「哲学を実践する」ことのリアリティはより実感されやすくなる。

特に「哲学コンサルティング」と呼ばれる領域は、主に欧米を中心に発展してきた哲学プラクティスとして知られる。たとえば、社員研修の一環に「哲学対話」やP4Cの手法を取り入れることで、職務への動機付け、課題発見、チーム・ビルディング、ブレイン・ストーミングのような役割を期待するというのは、比較的想像に難くない。

実際、欧州でこうした研修を受けたクライアント企業の社員は、「アジェンダが機械的に進行されるようなマネジメント会議では、まず行き当らないような個人的な規範や価値に触れられた」、「（これまで気にしていなかった）隣に座っている社員の意見や考え方に注意を払うようになった」と好意的にその成果について語っている。

哲学コンサルティングの応用範囲は、もはやこうした領域にとどまらない。企業の経営理念やミッションの構築、倫理規定の策定にも、哲学コンサルティングは絶大な力を発揮する。今や、企業の社会的意義・社会貢献がいつにもまして重要視される中で、そのミッションや理念を、対話を通してより洗練されたものにしていくことの重要性は、言を俟たない。

ここでは「学問としての哲学」の蓄積や成果も、その価値を発揮する。経営や

組織の理念やミッションを学問的に根拠づけられたものにしていくことを、哲学コンサルティングは可能にするからである。この意味で、アカデミアの内外が、言い換えれば、大文字の哲学と小文字の哲学がコラボレートする体制は、今後急速に発展していくようにみえる。

もちろん、その結果が、程度の差はあれ営利の追求を目的とする民間企業・団体の目論見と一致するかどうかはわからない。あるいは、このような形で哲学の成果や営みを活かしていくことには、事前に熟慮すべき様々な問題もあるだろう。しかしながら、実際に試してもみないうちに、こうした取り組みの可能性を考えても見ない向きがあるとすれば、それは端的に言って知的怠慢にほかならない。

実際、哲学の多面性を否定し、その一面だけを「哲学」と名付けようとする傲慢さに、しばしば遭遇することがある。しかし、すでに述べたような「民主性」が欠如していれば哲学の営みがそれ自体不完全なものになってしまう以上、その多面性を認めずに哲学することなどできはしない。そしてその現場が、多くの人にとって生活の決して少なくない割合を占める仕事の場であることは、むしろ自然なこと、そうあるべきことでもあるのではないだろうか。

この意味で、哲学を実践する（＝哲学プラクティス）と同時に、「哲学プラクティス」を哲学する、という往還関係に常に意識的であること、そして哲学の二面性・多面性を認めていくことは、ときに曖昧で消極的なイメージの中に埋もれた哲学を救い出す、一つの壮大な、しかし堅実な方策であると思われるのである。

未婚時代の今、なぜ『バチェラー』が人気なのか

松尾 知枝
婚活コンサルタント

女性向け婚活支援スクールの運営や行政の少子化対策支援事業など婚活コンサルタントとして10年で多くの活動をしてきたがこの業界に身を置く人間なら誰もが知っている人気動画配信コンテンツ『バチェラー』を恥ずかしながら見たことがなかった。『バチェラー・ジャパン（The Bachelor Japan）はAmazonプライムビデオにて配信されている日本の恋愛リアリティ番組である。イケメンで社会的地位を確立している独身男性（バチェラー）の元に集まった独身女性たちが、バチェラーの心を勝ち取るためにゴージャスでロマンチックなデートをしながら過酷なバトルを繰り広げていく戦いが見どころ。

ある年、養護施設の児童を支援する目的のチャリティー・イベントを主催することになり、オークションに出品していただける企業やスポンサーを探していたところ『バチェラー・シーズン2』でバチェラーを務めた小柳津林太郎さんに寄付をいただいたこともあり、同シリーズ最新作を見ることとなった。

恋愛リアリティ・ショーというだけあって、出演するのはカメラ慣れした俳優陣ではなく一般の独身男女だし（芸能界デビューを目論む素人枠も紛れているかもしれない）、設定や脚本も運命のパートナーを探すために凌ぎを削るというリアルなシチュエーションに基づいている。

生々しいリアルっぽさが随所に感じられる設定ゆえに、その態度を取ったら不利しかないのでは？と感じさせる展開や、嫉妬のあまり途中で棄権して帰る女性もいるなど、ドラマや映画にはない独特の面白さがあり、一度見始めると止まらなくなる。バチェラー配信直後、視聴者によるさまざまな考察、感想がSNSに書き込まれることからしても、この番組は注目度が高いのだろう。

しかし現実の社会において結婚は面倒くさい、コスパが悪いと嘆く声を聞くようになった。毎年結婚する人の数は減り続け、結婚しない人の数は増え続け

ている。生涯未婚率にいたっては2020年の生涯未婚率は、男25.7%、女16.4であるから男性の4人に1人、女性の6人に1人は生涯未婚となる。かつては皆婚規範が強く、特別な理由がない限り結婚するのが当たり前という共通認識があった。しかし、近年では結婚は個人の自由であるから、してもしなくてもどちらでもいいと考える人が増え、結婚を選択的行為として捉える見方が広まっている。

では、結婚に対する興味関心の度合いはどうだろうか。前述した婚活番組の人気度の高さはもとより、元皇族だった小室眞子さんのご結婚に至るまでのプロセスは一挙手一投足が報じられ、コメント欄には数多くの書き込みがなされた。結婚は両人の合意によって成り立つとされているにも関わらず、なぜ異様なほど注目が向けられたのだろう。

結婚はコスパ悪いと嘆かれるようになった今の時代において、婚活リアリティ番組や小室さんの結婚に強い興味関心が寄せられることについて、ある種の必然性があるような気がしている。そのことについて考えてみたい。

まず、結婚はコスパが悪いと捉える人が増えている要因について紐解いていく。

一つ目に考えられることとして、テクノロジーの発達により便利なサービスが増え、私たちの暮らしが飛躍的に便利になった点が挙げられる。家にいながらショッピングできて、食べ物を注文できて、大学の授業や会社の会議に出席できる。床掃除はロボットがやってくれる。このようにテクノロジーが提供する暮らしの利便性向上により恋愛快適性が相対的に下がったことが「恋愛は面倒くさい」と感じさせる要因の一つではないだろうか。頼んだらすぐ食事が届くUber Eatsに比べると恋愛は返事がすぐに来ないなど制御不能なことが多い。便利なものを使い慣れるようになると、関連ないと思われていた領域の価値観や習慣までも、不可逆的に上書きされていくのだろうか。

二つ目に考えられる要因として、ネットやメディアで夫婦の愚痴、壮絶を極める育児の様子など赤裸々に綴られた結婚後の現実を知ることで行動選択に少なからず影響を及ぼすのではないかという点である。綺麗事じゃない情報に接することで現実的に未来を捉えられるという利点もあるだろうが、人生設計においてより回避的な選択傾向が強まるのではないか。もちろん、結婚して穏やかに暮らしている夫婦や家族は多くいるだろう。しかし、ネガティブで過激な意見は少数であったとしても鋭さが際立つ。20代の女性に結婚願望の有無について聞き取り調査したことがあるが「いつかはしたいけど大変そう。あそこ

まで死にもの狂いで頑張れるか、自信がない」と消極的な意見が目立ったのが印象的だった。

ここまで、結婚はなぜ面倒くさいと考えられるようになったのか、主だった要因を考察してきた。ここから先は、未婚社会と言ってもいい現代において、バチェラーのような婚活リアリティ番組がなぜ人気なのかについて考えてみたい。

結婚が面倒くさいことの原因に、過程の複雑さがある。出会うためのアプリ、マッチング率向上にA Iを取り入れたものはあるが、成婚までを完全に自動化したサービスはない。しかし当事者にとって悩みが深いのは出会った後。いかにして互いを知り、関係を深めていくかという課題を抱えることになるのだが、恋愛から結婚という過程の複雑さはいかんともシステム化しづらく、現代の最新テクノロジーを用いてもなお、簡便化しづらい領域である。

しかし、婚活リアリティ番組を見ていて、一縷の可能性を見出すことができた。というのも、私はプレゼンテーションや画像をデザインすることに強い苦手意識を持っていた。しかしデザイン作成ツール『Canva』に出会ってから作業環境が向上した。クラウド上にストックされたテンプレートやグラフィックから目的に見合ったものを選ぶだけで、(それなりに)センスのいい制作物が出来上がるのである。デザインにともなう複雑な思考過程を大幅にショートカットできるようになった。

婚活リアリティ番組に私が可能性を感じたのは、デザイン作成ツール的な役割を果たし得るのではないか、という点においてである。番組では出会ってからカップル成立までに様々なドラマがある。ファッションやメイク、異性を惹きつけるための心理作戦、嫉妬に揺れ動く心情も詳細に描かれているので、恋愛から結婚に向かうプロセスがどのようなものなのか、(反面教師も含め)参考にしやすい。デザインとは、意図や計画を図案や絵に表す行為全般を含む。男女が出会って結ばれるまでの不確実な過程を映像で描写しているバチェラーは豊富なテンプレートをストックしたデザイン作成ツール的であると感じた。

複雑で扱いづらいものが視覚的かつ具体的に表現されたことで、結婚という面倒くさいものの一端を捉えやすくなったことからも、娯楽の域に留まらない役割を果たしていると言える。(皇室のご結婚問題があれほど大きな注目を集めたことについて、伝統と血筋などの特殊性を差し引いたとしても、出会いから成婚までの過程を一通り伺い知ることができたという点において、同様の要

素があったように思う。）

共通の記号があることで議論しやすいという利点もある。「コウさん」と言えば『バチェラー4』で主演のバチェラー役を務めた実業家のコウさんなのだと、番組を視聴している人であれば理解できる。記号やハッシュタグを駆使し、自分が見て感じたことを他の視聴者はどう感じたのか意見を比較したり、コメントを交わすなどして参考材料を集めることができる。

親が子供の将来を心配するのとは裏腹に、子供世代は、親の価値観や結婚戦略をそのままコピペしてもうまくいかないと、どこか諦観したようなところがある。でも一人でゼロから考えるのは大変なのでデザインを活用し、みんなの意見も取り入れ、自分なりの幸福を構築しようとしているように思える。

恋をする。これまで二人だけの閉ざされた体験であったのが、皆であれこれ言い合う共同体験にシフトしつつあるのは興味深い。たまたまヒットコンテンツが生まれ、偶発的な現象が起きているだけかもしれないが、IT化が恋愛のプロセスを面倒に感じさせたように、閉ざされたものが開かれていく過程において、この先、恋愛や結婚、そして家族というカタチはどのように変化していくのだろうか、行く末を見届けていきたい。

愛娘の「はんぶんこ」が教えてくれた、ほんとうの平等。

松田 崇弥
株式会社ヘラルボニー 代表取締役・CEO

「はい、はんぶんこ。」

もうすぐ3歳を迎える愛娘は毎朝、お皿に盛られているパンを分け与えてくれるようになった。「はんぶんこ」とは口頭で伝えられているものの、私自身が生きてきた世界で体験した「はんぶんこ」とは程遠く…実際には一握り、ラッカセイひとつぶんくらいのほんの一部である。でも、愛娘の肌の温もりを感じられるパンを与えられて、なんだかとても、満たされている自分がいるのだ。

身も心も温かくなるパンを頬張っていたとき、「人や国の不平等を無くしましょう」という政治家の発言が、朝のテレビ番組のニュースで流れてきた。愛娘が生きているこの国は、コロナ、貧困、格差が広がるなか、これからどのように育まれていくのだろうか。人や国の不平等がこの世界から全て無くなったとき、果たしてほんとうに全員が幸福になるのだろうか…物思いにふけりながら、私は「平等」について考え始めていた。

私は、「異彩を、放て。」をミッションに掲げる福祉実験ユニット・ヘラルボニーという…すこし変わった株式会社の代表をしている。日本全国の福祉施設でアート活動をする主に知的障害のある作家たちとライセンス契約を結び、異彩の作品を軸にしながら、百貨店を中心としたプロダクトブランドを展開していたり、作品を販売するギャラリーを運営していたり、街をキャンバスに捉えたアートプロジェクトを企画したり、最近ではクレジットカード事業も手がけている。

思い返せば創業してからの3年半、幾度となく「平等」という抗えない言葉の力によって、ご指摘を頂戴してきたように思う。「知的障害のある人が全員、才能がある訳ではないよ？」「賃金は均等割にした方が良いのではないの？」「福祉団体全体に寄付ができる仕組みは？」投げかけていただいた言葉の数々をあげ

れば、とてもキリがない。

それは全て「平等」という言葉が内包する力がもたらした善意の鉄槌だと、私は思っている。その言葉が発せられる背景には、「ダイバーシティ」「インクルージョン」「SDGs」等々、現代社会を象徴する言葉たちが大きな広がりを見せていることも一因しているように思う。世界が、この指とまれ！的思想の登場により、大きく前に進もうとしていることに力強さを感じると同時に、なんとも言えない不気味さを感じはじめている自分がいるのも事実だ。その不気味さの正体は、抗えない「正解」が生まれてしまうのではないか？という恐怖である。

「誰しもが生きやすい世界をつくる」という誰しも批判することのできない強い正解は、想像を絶するスピードでこの世界を席巻している。「1＋1＝」とテストでの出題があれば、私たちは迷わず「2」と答案用紙に明記するだろう。そんな単純明快な正解としてこの思想がこの世に周知されたとき、思考の多様性は消えていく可能性がある。この世界を「正解」が支配しはじめているという感覚に襲われる瞬間が、私にはある。

しかし、私の身近には正解に支配されない人物がいる。それは、実の兄・翔太である。彼は4歳上で、重度の知的障害を伴う自閉症がある。彼には、彼独自の正解が存在していて、すごくおもしろい。ほんの少しだけ、紹介させて欲しい。

彼は何年もの間、日曜日のランチには「ラーメン（花月・ニンニクげんこつラーメン）」を食している。そして、日曜日の夕方には「ちびまる子ちゃん」を必ず観ている。土曜日の夜に放送されていた「ブロードキャスター」というニュース番組が打ち切りになったときは、家族会議が開かれるほどに憤慨し、発狂していた。更には、月火水木金土日、自らが袖を通す洋服の上下セットまで決まっているのだ…つまり、自閉症の特徴である「強烈なこだわり（本人なりの正解）」が兄のアイデンティティであり、その「強烈なこだわり（本人なりの正解）」が存分に発露できる環境が生まれているのだ。

彼は、時代の潮流を理解して今現在の最適解を導きだそうとはしない。平等を振りかざして誰かを傷つけることもしない。当たり前だが政治的な忖度は存在しておらず、完全に松田翔太という一個人の正解のみでこの世界をサバイブしている…彼の生き方は、「社会」ではなく「個人」に向かっている。自分の価値観を最優先する生き方はとても清々しく、美しい。少しの羨ましさすら感じてしまう。

現代社会の正解に支配されることのない兄・翔太の存在を思ったとき、愛娘がくれた「肌の温もりを感じる一握りのパン」のことを、改めて思い返した。

「ほんとうの平等」とは、同じものを同じ量だけいただくということではないのかもしれない。それ以上に、必要な分を必要なだけ貰うことの方が、圧倒的に大切だと気付いたのだ。自閉症の兄が、ミシュラン3つ星のフレンチレストラン以上に、花月のニンニクげんこつラーメンを求め続けているように。私自身が愛娘から、ラッカセイサイズのパンを「はんぶんこ」にしてもらい大満足しているように…。寸分たりともズレのない均等な権利以上に、個別最適化された一個人にとっての安心感や満足感こそが、「ほんとうの平等」なのかもしれない。

「国籍」「人種」「民族」「宗教」「肌の色」「年齢」「性別」「性的指向」等々、世界は多様性の問題で溢れている。いくつもの情報のシャワーを浴びながら、私たちの感情は揺られている。そして、そんな世界で今日も必死に生き続けているのだ。

「誰しもが生きやすい世界をつくる」という抗うことのできない美しすぎる思想は、社会をもちろん前進もさせる。しかし、後退もさせるのではないだろうか。障害福祉の領域で勝負する人間としての一意見でしかないのだが、別の角度から見たとき、「誰しもが正解しか言えない世界が生まれる」可能性も内包しているように思えるからだ。

現代社会に整然たる正解としてこの思想が堂々と君臨したとき、それは果たして「誰しもが生きやすい世界」に繋がっていくのだろうか。均等割の権利よりも、個別最適化された幸福に寄り添える社会。私は、もうすぐ3歳の愛娘の与えてくれた「はんぶんこ。」が肯定される世界を望む。

地域と共にデザインする ～ 土と人のデザインプロジェクト ・ ゼロから晩餐会をデザインする

水内 智英
デザイン研究者・デザイナー / 名古屋芸術大学准教授

地域をつなぐデザインプロジェクトはどうあるべきか。2012年の夏から冬にかけて、私が所属する名古屋芸術大学の学生たちと、キャンパス周辺地域を舞台にプロジェクトを行った。地域の関わりを生むための総合的なデザインプロジェクトをやりたい、そう思ったのにはいくつか訳があった。2011年に名古屋芸術大学へ赴任し、久しぶりにデザインの研究・教育現場に身を置くこととなった。大学院を卒業してからは、デザイン事務所や広告を中心としたクリエイティブエージェンシーにデザイナーとして勤務していた。大学が仕事の中心的な場所となり、不安にも似た驚きを感じたことがいくつかあった。地域との繋がりが全くといっていいほどなかったこと、それに、デザインの細分化された専門分野に学びの現場が閉じられていたことだ。キャンパスは最寄駅から徒歩15分ほどの場所にあり、毎朝毎夕たくさんの学生たちが往来しているが、地元地域との交流はなく、地域は学生たちが通過するだけの場所になっていた。芸術大学が立地する地域は珍しく、そのポテンシャルはまちづくりにも活きるはずだし、生活の現場である地域を知ることなく、生きたデザインを学ぶことはできないはずだ。加えて、大学組織では専攻が区分され、グラフィック、メディア、プロダクト、工芸などの専門分野に分離されていたことにも驚きがあった。デザインの現場ではそうした分野の壁は既に限りなく融解しており、どこからがグラフィックデザインの分野で、どこからがメディアデザインの分野であるのか明確ではない仕事が多いのも事実である。むしろそうした既存のジャンルを横断し一続きのデザイン活動を展開することが求められている。そうした大学赴任に際して感じた違和感が分野横断的に地域に関わるプロジェクトを企画する動機になったのだと思う。プログラムを構想するにあたり、クリエイティブ集団graf代表でクリエイティブディレクターの服部滋樹氏に力になってもらった。服部氏は日本でいち早く多彩な専門家が集まるチームでデザインすることを始めた人だ。家具職人、グラフィックデザイナー、シェフ、そうした多様なメンバーで構成されたチームが展開する活動はどれも時代の半歩先を見越す活力のあるものだ。

「この地域にあるものだけを使って、晩餐会を開く」これが、私たちが学生たちに出したお題だった。プロジェクトは課外活動として行われ、学年も専攻分野も異なる学生たちが集まった。学生たちはもちろん「晩餐会」に出席した経験はなく、ニュース映像や映画で見る印象でしかなかった。それに、晩餐会をつくるにあたり必要な素材は大学周辺地域から見つけてこなければならない。晩餐会というキーワードを巡る思索が自然と始まった。食べ物はどう準備する？お皿や椅子はどうする？誰かを招くのなら招待状もいるかもしれない。学生たちは、晩餐会を開くために必要な材料を求め地域を歩きはじめた。そうするうちに、この地域の「あるもの・ないもの」が分かってくる。「料理をつくるための食材を探しているんです」「家具をつくるための木材が欲しいんです」。いやおうなく、学生たちは地域の人々を尋ね、頼ることになる。「食材ならあの豆腐屋が力になってくれるはず」「木材なら銭湯に行ってみたらどうか」。そんなふうに地域の人々も親切に学生たちの求めに応じてくれる。これまでこんな美味しい豆腐屋がキャンパスのすぐ近くにあったことも知らなかったし、商店街の銭湯が地域の廃木材を利用して湯を沸かしているとは思わなかった。そうして少しずつ地域の素材へとアクセスできるようになっていくのと同時に、この地域の見えていなかった魅力が見えてきた。大学周辺地域は、名古屋市のベッドタウンとしての性質が強く、一見すると都市郊外の特徴のない住宅街にみえてしまう。しかし、晩餐会の素材を求めて地域を巡ると、地元の人たちに愛されるパン屋、オーガニック野菜栽培を研究する団体、伝統に支えられた仏具職人といったように、魅力的な人たちが数えきれないほどおり、彼らから生み出される活動や物々で地域が満ちていることが見えてきた。そんな地元の人たちに支えられるように、学生たちは晩餐会を整えていった。例えば、地域の方から畑を借り、手取り足取り作業を教わりながら野菜を育て、収穫した野菜を使って料理を作った。畑作業はこのプロジェクトを象徴していたように思う。畑に足しげく通い、ふかふかとした土を触り、水をやり、芽が出て無事に伸びていくように世話をする。もちろん予定通りに育ってくれる訳ではない。作物を育てることはものづくりの根源でもある。

料理だけでなく、一つ一つの素材が地域から集められ手作業で整えられた。会場のテント代わりにナス農家からビニールハウスを借り、椅子は酒屋で見かけた運搬用木製ケースをヒントに銭湯から分けてもらった木材で制作した。地域の人から名前は忘れたが食べられると教えてもらった果樹からジャムをつくり、クローバーを刈り集めて招待状の紙を漉いた。そんなふうに、必要なものを学生たちは地域の人たちとの関わりのなかで制作していった。そして、晩餐会には準備でお世話になった地域の方々を来賓として招くことにした。それはとても自然な決定だった。その頃には学生たちはすっかり地域の人々と心を通

わせ、地域に馴染んでいた。プロジェクトの直接的な成果物は「晩餐会」かもしれないが、そのプロセスの副産物である学生と地域との繋がり、それが本当の成果物だった。もし仮にこのプロジェクトを「地域と繋がりをつくろう」と号令して始めていたら、こうした本当の繋がりはつくれなかったと思う。具体的な目標としての晩餐会があり、その目的のために一緒に作業をする。そうした、共に手を加えられる対象である「モノ」が人と人の間に介在していることが、スムーズな関係をつくることをこのプロジェクトは教えてくれる。

晩餐会当日を私はやや緊張して迎えた。ここに至るまで想像以上に多くの時間と労力を割いていた。というよりも、このプロジェクトは私にとって仕事ではなく、やり遂げるべきライフイベントになっていたというほうが正確だと思う。プロジェクトは多くの学生にとってもそうだったと思うが、これまで抱いてきた私の関心と深く接続されていた。プロジェクトは大学の授業とも単位とも関係のない完全な自主的活動として行われたこともあり、本当にやりたいと思う学生が集う場所になっていた。それぞれの役割もしっかりと定められていたわけではなく、プロセスも事前に計画されていたわけではなかった。進行するなかで必要なことが発生し、その作業をやりたいと思った学生が動きだす。そんな即応的なプロセスだった。だからこそ、学生たちはプロジェクトと自分の関心とを繋ぐことができたのだと思う。このプロジェクトの意味はそれぞれの学生にとり違うものになっているはずだ。デザインプロジェクトは、出来るだけ予め計画しない方が良いと思っている。デザインすることはそもそも「計画すること」であるし、プロジェクト立案とはそのプロセスや結果の詳細を決め管理することだと考えられいる。しかし過程や最終目標を定めすぎてしまうと、プロジェクトの途中で起こる状況の変化に翻弄されてしまうか、それを無視することになってしまう。予期せぬ出来事は、思わぬ好結果を生むための貴重な資源である。事前に定めた最終目標が本当にあるべき姿なのかは怪しく、実際にはプロジェクトを始めなければ分からないことの方がずっと多い。状況や参加者の気持ちの変化に柔軟に応えながら進めることで、プロジェクトは豊かな副産物を生み、定められた結果に縛られることなく、関係する多くの人にとって親しまれるものになる。

晩餐会では学生代表の挨拶があり、試行錯誤した創作のコース料理が振る舞われた。それ以外の特別な催しは企画されなかった。それで充分だった。音楽は地域の市民楽団が演奏を引き受けてくれた。お世辞にも上手とはいえない演奏だったが、その音楽を晩餐会の参加者や学生たちと一緒に聞いていると、思わず涙ぐんでしまった。あまりにもこの時間や空間が美しく感じたからだ。後に、編集者の紫牟田伸子氏を招いて、プロジェクトを振り返る機会を持った。その

際に紫牟田氏が評してくれた言葉が忘れられない。「非常にみすぼらしいですよね、でも本当に豊かですよね。この豊かさは21世紀が求める豊かさだと思うんです。」地域から集められた決して高級ではない素材を使い、全てが無骨な手作りで設えられた空間は、晩餐会という言葉の印象とは対照的だったに違いない。しかし、その場にいる誰もが一つ一つのモノの由来を知っていて、それを語ることができる。モノを介して人々が繋がっている。ものづくりに関わるデザイナーであっても、自分たちが扱う素材がどこからやってきてどこへいくのか分からない、そんな時代にあって、そうした物語あるモノに満たされた空間は、次の時代が求める豊かさであるに違いない。この参加型プロジェクトは私にとって最も思い出深いものの一つであり、折に触れて振り返ることを許してくれる強度がある。そんなプロジェクトを一緒につくってくれたチームや地域の方々に感謝している。

一般知能学の構築へ向けて

三宅 陽一郎
ゲームAI開発者 @miyayou

ジャン・コクトーの映画に『オルフェ』(1949年)がある。主人公が鏡を通り抜けて世界の中心へ赴くと、そこには林に囲まれた大きな広場があり、その中心に立つと風に木々が揺れるざわめきが聴こえる。そのざわめきが世界を統べている。世界の中心は中空だった。中空から世界が成り立っている。

村上春樹の『世界の終りとハードボイルドワンダーランド』(1985年)の頭の中の「世界の終り」世界では、巨大な穴があり、そこから気流が吹き上がっている。その流れは世界の底から吹き上げる外部世界からの嵐である。

知能を探求するのに、自己へ降りて行くか、世界を眺めるか、二つの方向がある。自己を見つめること、高い自己意識を持つことは、近代哲学の中心である。しかし、そこには無限に鏡を合わせたような迷宮が作られる。その迷宮は向き合えば向き合うほど深くなっていく。そして、その鏡には結局、世界が映っている。世界に目を向ければ、我々の内部の知能の迷宮は自然な形で世界を映すだろう。世界を見つめれば、実はそこには我々の内部世界が映っている。現象学は後者を選ぶ学問であると思っている。世界が知能の中に現れていること、世界の中に自己が現れている双対性を手掛かりに世界と知能の関係を解き明かしていく。

しかし、人工知能を作るために、世界と人間＝観測者という立場は非常に作りにくい。知能には行動を作る必要があるからである。現象学が「記述する」学問である、と言われることがあるが、それでは観測者を超えられないし、現象学のアウトプットは行為でなければならないし、不勉強な自分がきっと深く理解すれば、現象学の中心には、きっとそういうことが書かれているはずだ。知能は行為者であり、人工知能もまた然りである。行為のジェネレーションを持つ哲学が人工知能には必要である。ベルクソンの哲学はそれに近い。人間は既に世界に巻き込まれている。世界にどのように巻き込まれているか、それは身体を通じて、さまざまな多重な時間・空間の流れの渦が絡み合っている。その絡み合いの中に、身体のイマージュがあり、私はこれを我の身体と思うのである。身体自体は世界に深く根を持つ実体で、我々はその上に作り上げられたイマージュ

を身体と思う。イマージュは華厳哲学で言えば、世界の諸部と身体の諸部が響きあう響きの集合であり、同時にそれを隠してしまう存在である。

すると、世界から吹き上げてくる様々な流れが知能の中心に流れている。それは知能の中心を貫いており、知能を駆動している。しかし、それ自体は知能の構造としては見えない。誰が風を見ただろう。風車にとって風は風車ではない。しかし風がなければ風車は回らない。世界からの流れは人間の身体の中では、そのまま物理的衝撃であることもあれば、刺激となることもあり、情報となることもある。消化、代謝、呼吸も世界の流れと人間の連携の一つだ。そうやって、人間は世界からの流れを受けて活動している。人工知能もその原理を取り入れなければ、世界と連関した知能とはならない。仏教の唯識論は阿頼耶識から末那識、そして意識、五識を貫く流れを記述している。知能の中空を流れる世界の流れが、知能を駆動していることは、東洋では千年以上前から知られていた。情報の構造だけで知能を解き明かすことはできない。

人間の中心には世界からの流れが吹き上げている。身体が受けとめる流れもあれば、脳が受けとめる流れもある。そして、そこから行為をジェネレーションしていく。人間は世界の中にある存在である。世界からの流れの中で活動する。海があって魚があるように、世界があって人間がある。世界は人間を生み出した世界でもある。我々は世界に深く根差している。身体の神経を見れば、それはまるで根のようである。人間は動く植物であり、動きながら世界に根を張っている。だから記憶が必要である。一定の仕方でなく、空間全域に渡って根を張る必要があるからである。しかし、この根は双方向である。身体を通じて世界の流れを取り込む経路と、身体を動かす流れがある。植物でさえ、その双方向の経路を持っている。植物は動かない動物でもある。我々の脳はまるで球根のようにそこから世界へ向かって身体の中で神経の根を張り巡らせる。

人間の知能は絶対の知能ではない。知能と世界を分けてしまうと一般的知能、という発想になるが、それは天動説と同じくらい排斥するのが難しい。それは西洋哲学全般に染みわたっている考えでもあるし、人工知能においてもそうである。知能は環境の中で相対的に作り上げられる。我々の知能は杉や楓、タンポポやチューリップと同じぐらい特殊なものである。なぜ我々は世界の法則を理解できるかと言えば、ある世界の中で作られた知能は、世界の法則を利用できるように形成されるからである。物理学的な理解という意味ではなく、我々が生活するスケールにおいて理解する必要がある。すると、一般知能学は、環境と知能の相対性の上に確立される必要がある。世界の法則がどのように、知能の形成に関与するかは、まだ解き明かされていない。しかし、知能の中心を流れる世界からの流れは、結局のところ身体と世界のインタラクションの中で形成される流れなのであるから、この流れを受けとめ行為を作って行く知能には、

自然と世界の身体スケールでの理解が含まれることになる。この相対性の上に立てば、宇宙のすべての知能を内包する一般的知能学を築くことも可能だろう。

やがてディープラーニングで発展したニューラルネットワークの理論は、これまで蓄積された哲学との対応を発見することになるだろう。人工知能は、さまざまな哲学的アイデアを検証する場になっていくだろう。真理は一つであり、我々はそれを多面的に見てきたが、人工知能を作るという行為は、多面的な知識を一つに集積する効果を持つ。学問の細分化の果てに、諸学の統合が図られる。そのためのステージが人工知能であり、そこにはすべての学問的知識が流れ込む。真の諸学の厳密な統合と対応を、人工知能というステージの上に見出すのである。

異なる惑星の生物は、ニューラルネットワークではないかもしれないし、その可能性の方が高い。それぞれの生物は何らかの形の電子ネットワークを自然の中でかたち造って進化するだろう。しかし、その生物の持つネットワークの原理は、人類の持つニューラルネットワークと同じような性質を持つだろう。一般知能学は、ニューラルネットワークを超えた、一般的なネットワークの基礎の上に作られて行くように発展するはずである。

人間は観念の生き物であり、どんどんと原初の自然の結びつきから離れて、観念の階層を積み上げることができる。古典的に言えば、それは「人間知性の勝利と栄光」であり、我々は塔を登るように、次から次へと新しい階層が開かれていくのを目にするのである。しかし、その果てに何があるだろうか。知能の階層の果てには、無限の空室があり、我々はそこを果てしなく登って行くだけなのであろうか。世界から人間を切り離すには虚無が必要であり、逆に世界と人間が合一するためには世界と人間を結ぶ根が必要である。人間は世界と深く根でつながりながらも、その根から自由になるために虚無によって根を細くする。世界の中で世界と一体となり変化し続ける存在としてあるか、世界から離れて恒常性のある存在として生きるか、人間の実存は常にその中間を揺れ動いている。都市は恒常性と自律への追及であり、自然回帰は変化と合一への欲求である。このような中間的な立場にある人間こそは、真に自己を知らねばならない。我々は航海の途上にあり、もといた陸地に戻ることもできないし、自分が浮かぶ海と一体となることもできない。哲学は学問の司令塔である。我々は哲学を頼りに航海を続けねばならない。そして、真理の太洋は依然として、目の前に広がっている。

少数派が社会を変えるためのデザイン

村木 真紀
認定NPO法人 虹色ダイバーシティ 理事長

私は2013年からLGBT等の性的マイノリティ（以下、LGBTと表記）に関する活動を行うNPOを運営している。性のあり方で、日本では社会的に大きな「違い」がある。その違いのうち、ハラスメントや権利の有無など、あってはならない部分を社会的格差として可視化し、その是正を行うというのが、団体のミッションである。

私自身、18歳の時に自身が同性愛者と確信して、現在47歳。約30年間、日本社会の中で見えにくい少数派として生活してきた。本稿では、「少数派が社会を変えるためのデザイン」と題して、活動を行う上で気になる言葉をいくつかご紹介していきたい。

いる/いない

活動を始めた当初、数万人の従業員のいる企業の人事担当者が、「我が社にはそういう人はいない」と明言していた。自分が同性愛者だと確信した高校生の時も、自分以外にはいないような気がしていた。しかし、海外のデータ、日本でも行われるようになった各種の調査で、LGBTの人口割合は3%ー8%という結果が積み重ねられている。5%と仮定すれば、20人にひとりという確率である。数万人の従業員がいて、ひとりもいないと言い切れるだろうか。当時、その人事担当者が知っている人で公にカミングアウトしている人は確かにいなかったのかもしれない。しかし、「いる」という証明も、「いない」という証明も実務的に難しい。人事が存在を想定もしていない、「そういう人」と他人事のように言う職場環境を忌避して、入社する人がいなかったり、離職していたりして、本当にいなくなっているのかもしれない。職場でアンケート調査をしても、自分が回答したと知られたくなかったら、本当のことは書かないかもしれない。さらに、安易に「いる」と断言してしまうと、「もしかしてあの人か」と特定されてしまう恐れもある。今なら、「我が社の従業員が日本社会の多様性を概ね反映していると仮定すると、数万人の数%で、100人単位でLGBTはいるはずだが、職場で広く公にしてもいい人を私は知らないので、いるともいないとも言えない」と言われるだろうか。

見える/見えない

私たちは学術機関と連携して累計１万3千人以上の声をアンケート調査で集めているが、「誰にもカミングアウトしていない」という人は毎年一定数いる。自分自身でも確信が持てない場合もあるだろうし、ネガティブな反応をされることを恐れて言わないケースもあるだろう。同性パートナーがいる場合に、「付き合っている人はいるのか」と聞かれると、嘘をつかざるをえないことがある。私の場合は、自分が言わなければ、周囲には見えない。そう思っていた。

一方で、見えてしまう場合もある。生まれた時に登録された社会上の性別と、自認する性別が違うトランスジェンダーの場合、身長、体つき、頬骨、喉仏、指の骨など、外から見える性別の特徴と、服装や髪型、メイクなどの見た目の性別が一致しない時に、日本では周囲の人からジロジロみられがちだ。こうした目線は、特にトイレや更衣室など、男女別のスペースを使う際にストレスやトラブルの元になる。男女別の服装規定があり、男性のみ髪を短くしなければいけない職場もある。周囲の目線やトランスジェンダーの存在を想定していないルールによって、人事に相談せざるを得ないこともある。見えてしまうから、言わざるを得ない、というケースだ。

ちなみに、言わなければ見えないと思っていた私も、そうでもなかった。ある高校の同級生は、私の目線や態度から、実は気づいていたと後から教えてくれた。パンツスーツ、ショートカット、眼鏡、ローヒール、全般的に男性受けを考慮しないファッションは、実は欧米でよくいる感じのレズビアンで、外資系の企業で「言わなければ分からない」と話したら、ジョークだと思われたこともある。自分では上手に異性愛者に擬態していたつもりでも、人や社会の認知度によっては容易に見えてしまうことがある。だからこそ、もし見えたとしても、不利にならないような社会を作らなくてはいけない。

違う/同じ

2021年に新聞のオピニオン欄に「婚姻の平等、もう待てない」と題して、同性婚の法制化を求める投稿をした。書き出しは朝食に卵料理を作る風景だ。家族の風景は多数派の人と同じだ、ということを伝えたかった。ちなみに、報道でLGBTに関するニュースを見ていると、カップルへの密着取材では、ほぼ100%、食事の準備風景が入るので、思わず笑ってしまう。

続いて、いざという時の話だ。健康で平穏な日常風景であれば、同性愛者も異性愛者もさほど変わらない。しかし、どちらかに病気、怪我、障害、死亡、別離などがあれば、法で守られていないことから、社会の扱いが異なる。病院で面会できないことも、病状説明されないこともある。大事な人の葬式で居場所がなく、相続もできず、二人が暮らした家を出るしかないこともある。若い時には、法に

よる保護の切実さが理解できていなかった気がする。自分達の気持ちさえあれば、祝福や承認なんて不要だと思っていた。法律が必要なのは、健康や稼ぐ力を失った時なのだ。

女性/男性

同じ同性愛者でも、男性として育てられた経験と、女性として育てられた経験はまた違う。先日、北丸雄二さんの『愛と差別と友情とLGBTQ+』という本を読んで、痛感した。

北丸さんはゲイであることをカミングアウトしている、元新聞社勤務のジャーナリストで、私より20年近く年上である。本の内容自体は、興味深く、面白かったのだが、大上段から国家社会を語る、怒りや悲しみをそのまま表明できる、凝った文体や華麗な単語を使える、というところに、私は羨ましさを感じてしまった。40代の女性である私が、60代の男性である北丸さんと同じようにしたら、どれだけ反感を買うことか。

私は女性として、学校や組織の中で30年くらい生きてきた中で、主に決定権を持つ年上の男性に、攻撃されない表現の作法を身につけてしまっている。私は、多くの人が理解できる平易な言葉で、身近な生活実感から、突っ込まれても大丈夫なデータと事例を常に準備して、怒りたいところでも無理に微笑みながら話している。恐らくこれは女性としての抑圧の経験があって出来上がったスタイルなので、いいことなのか悪いことなのか分からない。もちろん、男性として育つと、人より賢そうにしないといけないとか、議論で負けてはいけないとか、女性とはまた違う圧力があるのだろうとは思う。

企業の経営層向けにLGBTに関する研修を依頼されることがあるが、現状、日本の大手企業のトップはほとんどが中高年の日本人男性なので、年代、性別、性的指向が違う、程よく一致点がなく、しかし、日本人として日本企業で働く作法を心得た、私の話は聞きやすい、ということはあるのかもしれない。今後、企業の経営層の多様化が進んだら、私ももう少し心のままに話せるようになるだろうか。

Art/Action

これは私たちが作成して、「NIJI BRIDGE」というウェブサイトで公開している世界地図である。性的指向に関する権利に関して、国の法律によって色分けした地図だ。元のデータは欧州中心に活動する国際的なLGBT団体ILGAのデータを参照している。さて、この地図を作る上で、どんな工夫がされているか、お分かりだろうか。

この地図の目的は、主に企業の人事部門の担当者に、人事施策の参考にしてもらうことだ。よって、どの地域で同性婚ができるのか(人事システムに関連することもある)、どの地域で従業員の身の安全に注意が必要なのか、というのがパッと分かること(そして、それ以外の箇所に注意が向かないこと)を重視している。

作成上の工夫

・英語から日本語にし、簡単な解説文を付けた。
・参考にした国際団体の地図は大西洋中心の世界地図になっているが、日本の人が教科書などで見慣れた、太平洋中心の、歪みのないメルカトル図法に変更。
・LGBTの権利に関する「先進国」は既に同性婚が実現しており、その中の違いがわからないので、元の地図は権利保護の度合い(憲法で保護されている、法律で保護されている など)で青色を細分化している。日本では同性婚がまだ実現していないので、その遅れが目立つよう、あえて青の国を細分化していない。
・北方領土やクリミア半島などの紛争地帯は、実効支配している国の法律を参照。
・白黒コピーされて配布されることを想定し、白黒でも判別しやすい色を使用。

最近、この地図を見ていると、日本が地政学上、重要な位置にいるのを実感する。米中の経済対立という大きな構図の中で、LGBTの問題でも、日本はグレー色。同性愛者は犯罪者ではないが、他の人と同じ権利があるわけでもない、という色だ。グレー色であることは、中立を意味しない。青色の国の人にとっては、平等な権利がないということは、今や迫害する側である。私は日本に一刻も早く青色の国になってほしいし、他のアジア諸国の仲間たちを助ける側になってほしい。

小町のように、命懸けで

持田 睦
「ゆっくり考えるための塾」塾長、演出家（PuP）

初っ端から自らの無教養をさらけ出すようで恐縮だが、六歌仙のひとり小野小町が一級の、いやいや超一級の歌人であることを、天命を知る齢を迎えるまで、僕はまったく気づくことなく暮らしてきた。

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

若年の頃から極度の薄毛に悩んできた僕は――幸いなことに――加齢に伴う頭髪の喪失を通じて、自らの容姿の衰えを激しく感じることはないのだけれど、目尻の下に浮かぶ染みは――不幸なことに――年々その面積を増していくため、朝夕洗面所の鏡に目を向けるたび、わが身の盛りがとうの昔に過ぎ去ってしまったという悲しい現実を思い知らされずにはいられない。

思えば僕の人生は、時折好天に恵まれることもありはしたけれど、長雨に悩まされることの方が圧倒的に多い日々だった。大学院在籍中に始めた演劇活動を本格化しようと、ウィーン経由で東京に向かってみたものの、演劇の世界は何一つ足場を持たない人間が活躍できるほど甘い世界ではなく、気が付けば、生活の糧を得るためだけに始めた塾の非常勤講師の仕事が、僕の人生の八割以上を占めるようになっていた。

誤解を避けるために申し上げておくが、僕の人生が長雨続きであった原因は、塾の非常勤講師の仕事で出会った僕の生徒たちにあるのでは決してない。むしろ、この身に降り注ぐハード・レインの中、それでもなんとかやっていくことができたのは、まったくもって彼らのおかげにほかならない。彼らが僕に寄せてくれた過度の信頼を思い出すたびに、僕は心底面映ゆくなり、そして祈らずにはいられない。彼らの人生に幸あれと。

二〇年以上の長きにわたって、泥水を飲みながらも続けてきた塾の非常勤講師の仕事を、僕は今年思い切って辞めることにした。その大きなきっかけは、井の頭線沿線で妻とともに始めた僕たちの塾だ。マンションの一室を教室とした、本当に本当に小さな塾だけれど、自らの農地を得ることができた小作農の

喜びはあまりに大きく、この僕たちの塾が夢のように消えてしまうことだけは絶対にないようにと、毎日全力を尽くしている。

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを

小町が超一級の歌人であることに遅ればせながらも気付かされたのは、僕たちの塾での授業中、中学校の国語の教科書に載っている小町の歌を、生徒とともに鑑賞していた時だ。反実仮想の助動詞「まし」の用法が、英語の仮定法の用法とよく似ていると聞いてはいたけれど、なるほど、この歌の英訳には、次の仕方で仮定法過去完了の表現（If S had＋過去分詞＋~, S would have＋過去分詞＋~.）が含まれていた（訳者はKenneth Rexroth）。

I fell asleep thinking of him,
And he came to me.
If I had known it was only a dream
I would never have awakened.

この英訳を再び日本語に戻すと、次のようになるだろうか。

彼のことを思いながら眠りにつくと、
彼はわたしのところに来てくれた。
夢に過ぎないと知っていたならば
目覚めることは決してなかっただろうに。

仮定法とはご存じのように、現実とは反対の事柄を仮想する際に用いる表現であるが、仮定法の根底にあるのは、仮想された事柄とは正反対の現実である点を、決して見落としてはならないだろう。小町の歌に関して言えば、彼女が「覚めざらましを」と仮想せずにいられないのは、「彼がわたしのところに来てくれない」というあまりにも悲痛な現実があったからだ。「現実において会えないならば、せめて夢の中で！」平安時代を生きた小町の願いは、複製技術の時代である近現代においては、「現実において会えないならば、せめてスクリーン（画面）上で！」という願いへと進化した。僕たちは日々、有名スターと映画のスクリーン上で会い、人気アイドルとテレビの画面上で会い、コロナ禍のため対面授業に出席できない学生とパソコンの画面上で会い、遠くに暮らす友人とタブレットの画面上で会い、すでに亡くなった身内とスマホの画面上で会う。会いながら思う。やっぱり会いたいな。

夢路には足も休めず通へども現に一目見しごとはあらず

インターネット上で見つけた小町のこの歌もまた、超一級の歌だと思った。夢の中での恋する人との出会いを、小町が物足りなく感じているのと同様の仕方で、スクリーン（画面）上での他者との出会いを僕たちも物足りなく感じているのだとしたら、その理由は恐らく、他者の肉体の不足にあるだろう。僕たちは、夢の中やスクリーン（画面）上で他者と出会うとき、自らの脳内で作り出される彼らの幻影としか出会っていない。一方、現実における他者との出会いにおいては、彼らの幻影に加え、その肉体とも出会っている。なるほど、肉体と肉体が出会うとき、そこには互いが互いの生命を奪う可能性さえ存在する。しかしながら、ここうした可能性――死の可能性！――が含まれた出会いであるからこそ、僕たちは、命懸けで人を恋した小町のように、生き生きとした仕方で他者と出会うことができるのではないか――。僕はこんな贅沢なことを考えながら、僕たちの塾で、小学生から高校生までの生徒たちと日々向かい合い、生きている。

教育の隘路 〜 共創教育の現場から抽出した違和感

安本 志帆
「“どこを掘っても温泉” 対話」を目指している水脈系ダウザー

1.「共創」が必要な時代

近頃、「共創」という言葉を耳にする機会が増えました。事実、検索窓に「共創」というワードを入れて結果を表示すると、膨大な記事がヒットします。ご存じの方も多いとは思われますが、「共創」という語はCo-Creationの訳語で、ビジネスの世界でいかに新たな価値を創造するかチャレンジするために導入された概念です。もちろん営利活動に限らず、新たな価値を創造しようと尽力している方々にもこの共創という概念が応用されています。

そういった応用をした領域の一つに、教育があります。もちろんインターネットが普及した現在、教育の現場も変容を迫られています。インターネットは多様な方々との異文化コミュニケーションへの可能性の扉を開いたかのようにみえました。ところが、高度に発展した検索アルゴリズムがもたらしたのは、エコーチェンバーやフィルターバブルといった、自身にとって都合の良い情報ばかりを再生産するという、近づいたら閉じてしまう扉でした。したがって、現代を生きる私たちは、他者とのコミュニケーションの機会が失われかねないという問題と向き合う必要性に駆られています。

このような時代認識に立てば、「共創」という言葉が様々な場所で様々な意味を持って、現状を打開するための運動として称揚されていることも不思議ではありません。しかしながら、人種や文化、性別等々の差別は一向に解消されず、むしろ「差別はよくない」という枕詞を使っているにもかかわらず、話してみれば、無自覚な偏見が露呈し傷つけあうというマイクロアグレッションが発現している場面に、私は何度も立ち会ったことがありますし、私自身が傷ついたこともありますし、当然私が他の人を傷つけてしまっている可能性についても目を背けることは許されません。

ではなぜこうした差別や偏見が無くならないのかと言えば、文化や性別を「超える」ということが、簡単ではなく、言うは易し行うは難し、というのはまさにこのことだからです。特に教育現場においては、幼児・児童・生徒たちの人権意識を育む上で大きな影響を与え、ともすれば差別の再生産に加担してしまい

かねないという意味において、こうした問題は特に慎重に吟味される必要があり、教育現場にいる私にとってまさしくこの問題に取り組むことを避けては通れません。

ところが教育の現場が、この「共創」という運動を取り入れるにあたって、私はいくつかの大きな違和感を抱いています。このエッセイでは、こうした違和感に向き合い、そして実践してきたことの簡潔な報告をさせていただきます。このエッセイが、こうした違和感を紐解くヒントになれば、それに越した喜びはありません。

2.「共創」に着目したきっかけ

ここで私がどのような人物であるのかを少しご紹介しながら、なぜ私が「共創」なるものに着目をするに至ったかを書いてみたいと思います。

私は二児の母であり、幼稚園教諭をしながら哲学プラクティスの実践者としても活動をしております。そもそも哲学プラクティスとの出会いは、我が子が発達障害の当事者であり、私が当事者家族であったことが大きいと思います。日本の「社会」という枠の規範に合わない我が子がよりよく笑顔で生きられるためには何をすればよいのだろう、その方法の一つとして私には哲学プラクティスが必要でした。なぜ我が子がただ笑顔になるために母の私が哲学までしなければならなかったのか、私が現代既存の社会の中ではいわゆる「育てにくい」とされるこどもを育てるために、その社会にあった得体のしれない歪みや分断に対して私が今も挑み続けるひとつの理由なのかもしれません。

「哲学」は、自らが発する一つひとつの単語レベルで検証に付され、なぜその概念を用いたのか説明を要求される極めて批判的な営みだと私は考えています。それは、私の用いる言語や、生きている世界そのものが疑義に付され、解消されることなく、よりどころのなさを強化してしまうこともあれば、「幸せ」概念が棄却されてしまいかねないような、とても恐ろしいものです。「哲学」は、何不自由なく健康に暮らしている人々にはおおよそ必要のないものかもしれません。というのも、「なぜ生きているのか」といった素朴な疑念を多かれ少なかれ「仕方がない」として、社会を構成する様々な約束事に適応できてしまうからです。しかしながら、私には哲学が必要でした。もっと踏み込んで言えば、私は哲学することを強いられる境遇に置かれていたのだと思います。

私は2018年こまば哲学カフェで「インクルージョンは可能か」というテーマの哲学対話の企画をしました。そこには、社会的マイノリティの属性を持つ知人友人がかけつけてくれました。少なくとも発達障害、肢体不自由、トランスジェンダー、在日朝鮮人、の属性を持つ知人友人を中心に対話の場を創った時、あまりにそれぞれが感じていた社会の側にある障害が違いすぎ、これを全部ク

リアする社会デザインなんて不可能なんじゃないかという絶望で「そもそも一緒にいる必要性ってなんだっけ」という問い自体が愚問に思えるくらいにわからなくなっていました。でも、この哲学対話をきっかけに肢体不自由な友人と一緒にレストランにいくことになり、その友人が安心して食事ができるお店を私自身が知らない、もっと言うと、どのようなお店を選んでよいのかわからないという現実を目の当たりにしました。でも、「一緒に楽しくご飯を食べながら語らいたい」という想いのみで一生懸命お店探しをする自分の姿に「これでいいんじゃないの？」とも思ったのです。「ああ、そんな難しいことじゃなかったんだ」と。そこからは、「様々な人と出会うこと」が差別や分断をなくすんだと希望を持ちながら、実際に普段私があまり簡単には出会えない人たちと哲学対話を通して出会うことができました。

例えば、60、70、80代の人、不登校、ひきこもりの当事者、LGBTQに対してアライな人、一定程度の精神障害の状態にあることを認定された人、アルコール・薬物・買い物・セックス等の依存症当事者とその家族、視覚が生活する上で不自由なくらい弱い人、視覚のない人、南相馬市の公立中学校の生徒と教員、等々です。そこで私は様々な立場の語りから見た「社会」をいつもよりも少しだけ丁寧に想像させてもらうことができたのですが、もう一度、やっぱり絶望してしまったのです。なぜなら私が出会った人たちは一度に会したのではなく、それぞれ個別にその社会的属性を設けた上でなければ出会いづらい、という境界の存在をはっきりと感じたからです。ただ「共にいる/ある」だけのことがこんなにも遠いところにあるという肌感覚と言葉の軽々しさのギャップに、「共に」とはどういうことなんだろうと強く関心を抱いていた時、「共創」という言葉が世間ではにわかに流行り出したというのが「共創」に惹かれた最初のきっかけです。

3.共創教育の実践

そこで私は早速、「犬てつ」という、こどもと大人のフラットな哲学的対話に尽力する団体において、共創を実践しようとしました。そこでは、参加者のこどもと大人に一緒に1つの新しい運動会の競技を創ろうと提案しました。「一緒に1つ」という期待とは裏腹に、小さいグループが個別に出来上がり、声の大きい子がリーダー役のようになり、他の子は指示に従うという現象が起きました。グループの属性をみてみると、小さい子同士や仲良し同士であって、コミュニティ自体に慣れていない子が蚊帳の外に置かれてしまっており、不穏なスタートでした。運動会開催が近づくにつれ、方向性が統一されていないことや、思い通りにならないことに焦った小学校高学年のこども達が涙を流して泣き出しました。他者と「創る」ためには、「合意」が強いられます。哲学対話を３年以上一緒に続けてきた子ども達の多くは、多数決が、少数意見を尊重することを難し

くしてしまうことも肌で知っています。子どもたちは困惑し、雰囲気は険悪。最後には自分の意見を譲った子どももいましたが、私には「やけくそ」のようにも見えていました。

「教育とは何なのか」という問いが最も真剣に問われなければならない場面に、私は出くわしたわけです。

その後の経過について詳しくは脚注 にてご覧いただけます。

4.結びに代えて

「共創―共に創る―」とは誰が（何が）どうなることなのでしょうか。「共創」を通した実践で立ちはだかったものは「教育」という難問でした。それを考える上では「合意形成」にも向き合わざるを得ず、これらの概念もさらなる検証に付されなければなりません。沈黙してしまえば、それは自ら対話の余地を閉じてしまう最悪の結末です。わからないままにでも語るべきなのだろうと思います。今の私に仄見えているものは「折り合い」という概念です。何かに触れたようでいて、離れていってしまう、けれども、ふと気づくと手元にあったりもする、そのような概念ではないかと当たりをつけたくらいの感覚です。気づいたらぽつりぽつりと発せられる一つひとつの言葉が何よりも尊く、少なくとも「共創」と「教育」が融合するのは、近い将来では間に合わないような、そんなスピード感で私はこの問いを捉えたいと思っています。もう少し言うと、「共創」と「教育」を無邪気に連ね、教えたつもりになっている自分に気づけるかどうか、ここの一点が、大人として最も注意を払わなければならないことだと思っています。残された課題は山積みです。それでも、私が哲学を強いられていることに変わりはありません。「答え」のカタチをした言説を手にするのは簡単ですが、それを欲しがってしまった時点で、哲学はただの同調圧力による歓談になり果てると考えています。今一度、「共創―共に創る―」とは誰が（何が）どうなることなのかを何度も自問自答し、かつ、本質的に自分とは相いれない「他者」なる者との対話に、私はこれからも挑戦し続けたいと考えています。

---

[1] https://spotsuku.jp/column/1374

違いのある人同士の社会的関わりはどうやったら作れるのか？という問いに対して、最近挑戦していること

山田　小百合
特定非営利活動法人Collable 代表理事

インクルーシブデザインの取り組みをはじめて10年ほど、これまで老若男女、障害等もさまざまな人たちと「デザイン」に関わる機会が多くあった。デザインといえども私の場合はワークショップをベースとした、多様な人たちとの関係づくりがメインの取り組みとなるので、いわゆる「デザイン」という言葉でイメージされる、視覚的に美しいアウトプットを出すところは他のプロフェッショナルのお力をお借りする事が多い。

インクルーシブデザインに取り組むワークショップの場は、社会参加の場でもあると私は考えている。それほど関係構築ができていない人同士、場合によっては初対面同士がテーブルを囲み、お互いの視点・観点・考え方などを共有しながら、１つの目的に向かってアウトプットを模索する。その営みは、まさに社会活動そのものだと思う。特にインクルーシブデザインは障害のある人など、その場では特異な立場になり得る人にあえて入っていただきながら活動をするデザイン手法になる。そのため、違いによる認識の違い、コミュニケーションの違いなどが浮き彫りになることが多い。例えば、見えない人に、なにか指を指しながら「あれ」などと言っても、「あれ」が意味するものがなにかはわからない。もちろん会話の流れの中で使われて伝わる文脈的なものから意味が推測できるものはあるが、会話をしているグループのほとんどが晴眼者の場合、ついそんな言葉で会話を進めてしまう場面が出てくる。すると、見えない人だけ「あれ」についていけてないと気づきながら、言葉で伝えたかったことを考えようとする。このようなかたちで、私たちは言葉で捉える世界が少し違うということがわかったりする。聞こえない人が手話を通じて物事を理解しようとする場合もそうだし、車椅子を使う人の目線と他の人の目線が違うからこそ、見えているものが微妙に異なっていたりすることも同じことである。

こうした取り組みは、個々の違いを直接ぶつけるというよりは、テーマや目的を言い訳にして、お互いの違いを知ることができる。だからこそ、障害のある人

が持つ違いが社会的に弱い立場であるように、多くの人はつい解釈しがちではあるが、単なる違いとして受け入れていきやすい側面がある。

ただし、インクルーシブデザインで協力をしてもらう障害のある人達は、来てもらえるなら誰でもいいというわけでは決してない。そもそも前提として、人とのコミュニケーションを楽しめるような人でなければ、こうしたやり取りをポジティブに進めていくことが難しい。そして、残念ながらそういう協力者(リードユーザーと呼んでいる)を招くうえで、ある種のセレクションをせざるを得ない現実が隣り合わせにあった。ワークショップ自体はクライアント、テーマが第一目的に行われるからこそ、どういう人がその場に参加するのかというのはそもそも重要な点であるのだけれど、リードユーザーを探すとなった途端に、だいたい「いつもの人」がいて、他のワークショップ実践者の現場や、ワークショップ以外の楽しい場にその人はいたりする。

ワークショップの目的を達成することだけで見れば、それは「仕方のないこと」かもしれないけれど、本当に「仕方のないこと」なのだろうかと思っていたのが数年ほど前。そもそも私がワークショップやインクルーシブデザインに関心を持った入り口は、「障害などの異なる人同士の社会的な関わりはどうやって作ることができるのか」という問いをひっさげて、大学院修士課程に進学したところから始まっている。“社会”参加、“社会的”相互作用—そんな言葉が私の関心だったし、「社会」的営みをどう作るのかという関心はNPO法人を立ち上げてからも変わっていない。

この問いからこれまでの取り組みを振り返ってみると、リードユーザーを「選ぶ」という行為は、結局「人当たりのいい人とやるとうまくいく」という結論に着地してしまっているような気がしていた。インクルーシブデザインの領域でいうと「リードユーザーの育成・教育」という観点の研究や取り組みもあるが、そもそもインクルーシブデザイン以前に、障害のある人の社会的関わり方の学びの環境が不足しているという状態を解決しなければ、インクルーシブデザイン自体も世に広げていくには限界が出てくる。

そんなモヤモヤした気持ちから、障害のある人の社会参加という観点で、何が社会課題としてあるのか、調べたりする日々の中で、障害当事者が社会的な関わりを最初に自立的に行っていくタイミングが、就活に直面する大学生くらいの歳であることに気づいた。大学までは、場合によっては保護者のサポートも、大学のサポートもあるが、いざ就職をするとか仕事を始めるとなると、これま

で以上に自分で考え、自分で環境をつくり、自分で決断・判断をする場面が増えていく。人と協力して価値を生み出していかなければいけない時間も圧倒的に増えていく。私はここに着目し、2020年から障害のある若者、特に大学生を対象とした、キャリア学習支援（社会移行支援）に取り組み始めた。

インクルーシブデザインを広げていく活動とは異なり、大学生との関わりが増え、彼らは「就活」というタイミングで周りの友人達と異なる進路選択を強いられていることに気づいていたし、孤独や不安を感じていた。一般的な新卒採用だと選択肢がたくさんありすぎて、それはそれで学生は不安な気持ちを抱えながら就活をするが、障害学生は選択肢がなかったり、見つけにくかったりする。実際障害がありながら就活にどう取り組んだのかという事例や体験談もなかなか見つかりにくい現状にあり、学生たちはますます不安を抱えていく。加えて、障害のある社員に企業のバックオフィスの採用口がないのは、それ以外に与えられる仕事が思いつかない企業が多いからで、それは同時に、学生に社会的経験の機会を与えていない社会の構造がもたらした結果である。もっと彼らが社会で活躍できるステージは用意できると思う。

そんな学生たちに社会経験の機会として、2021年からはインターンシップのプログラムを立ち上げたり、それを契機として当事者の学生同士の対話の機会を作ったりし始めた。インクルーシブデザインとは一見異なるが、ここで学生たちが社会移行をし、社会でどんどん活躍してくれたら、ある意味でインクルーシブデザインに取り組まなくとも、多様な人たちとの関係性を社会に多く生み出せるし、いきいき働く当事者が増えれば、彼らは未来のリードユーザーにもなり得ると期待している。

この新しい取り組みも、社会をデザインするという観点では大事な取り組みだと思っている。同時にまだまだ社会課題として認識されていないとも感じているので、社会をよりよくデザインしていく上で、一生懸命この構造的な社会課題の認知を広げていきたいと思っている。そして、ある意味で当事者のリアルな声をより直接的に受け止めるような状況にあるので、ぜひ若者の声を一緒に聞いて、一緒に課題解決に向かう仲間も探していきたい。当事者自身が、社会のデザインに関わっていける社会にするために、仲間を募集しています。

以前こちらでお世話になって以降、現在の取り組みとしては、インクルーシブデザインに加えて取り組んでいることが増えてきたのですが、インクルーシブデザインの関心も変わっていなければ、そもそも根底にどんな関心ごとがある

のか、整理してみました。引き続き「障害などの異なる人同士の社会的な関わりはどうやって作ることができるのか」という問いに立ち返りながら、目の前のことに取り組んで行きたいと思っていますし、関心のある方とぜひつながっていけたらと思っています。

「社会において哲学が求められている」と言われるとき、実際には何が求められているのか？

山野 弘樹
哲学研究者

2020年は、世界的に新型コロナウイルスが蔓延し始めた年でした。2022年を迎えても未だに収束の見えないコロナ禍により、私たちの習慣や生活様式は大きな変容を被っています。実際の移動や対面のやり取りを伴わないリモートでの仕事が爆発的に増えたのは、その一例であると言えるでしょう。そして、東京大学のUTCP（共生のための国際哲学研究センター）においてオンライン上のイベントが数多く行われるようになったのも、まさにそうした流れを受けてのことでした。

東京大学が積極的にオンラインのイベントを行うようになったのは、最初の緊急事態宣言が東京を中心とした七都道府県に発令された、その一か月後のことです。私個人は、指導教授でありUTCPのセンター長でもあられる梶谷真司先生の仕事のお手伝いをする形で、2020年5月9日に行われた「コロナ危機と来るべき世界を考える――Yuval Noah Harari: The World After Coronavirusを手がかりに」をきっかけに、初めてオンライン・イベントに参加する機会を得ることができました。そして、そのイベントが終了した後に「もし何かオンライン・イベントの企画があったら教えてください」と梶谷先生が仰っていたことをきっかけに、「自分であればどのような哲学のオンライン・イベントを開くことができるだろうか？」ということを考えるに至りました。それから12個のイベントをオーガナイズし、学内および学外から、総計31名の方をゲストとしてお招きしました（2021年3月27日に行われたイベントは、東京大学と立命館大学の合同シンポジウムでした）。東京大学のUTCPが主催するイベントということもあり、私が企画したイベントだけでも、おそらく2000名以上の方々が実際に参加してくださったと思います（「実際に」というのは、事前申し込みの時点ではさらにその1.5倍以上の人々から参加登録があったからです）。本稿では、12個のイベントで企画、および司会・進行を務めた私が「社会と哲学の関係性」について感じたことを簡潔にまとめてみたいと思います。

よく言われるストーリーは次のようなものです。「哲学はいろいろと難しいことを考えているが、実際には抽象的なことを語っているだけで、現実社会に

は何の役にも立たない……そのように思われている。しかし、近年においてはむしろビジネスの現場において哲学的な思考が求められており、企業や学校でも哲学対話の試みが数多く広くなされている」。そして、「ビジネス×哲学」といった仕方で、哲学の社会的意義を伝えようとする著作も数多く出版されています。私自身、こうした流れに沿ったオンライン・イベントをUTCPで企画したこともあります(「なぜ哲学が「ビジネス」の現場で求められるのか？」2021年8月29日開催)。

しかし本稿では、上述のストーリーをさらに深掘りすることを試みたいと思います。本稿で考えたい問い、それは「「社会において哲学が求められている」と言われるとき、実際には何が求められているのか？」というものです。ありがたいことに、決して少なくない数のビジネスパーソンの方や教育関係者の方が、「これからの時代においては哲学が必要だ」と仰ってくださいます。しかし、「そのとき実際には何が必要とされているのか？」ということをさらに考えてみたいのです。

「そんなの、本人たちに聞けばいいじゃないか」と言われてしまいそうですが、なかなかそうもいかないのです。なぜなら、「あなたは今「哲学が必要である」という言葉で、実際には何が必要だと考えているのですか？」という質問は、かなり難しいものだからです(実際にその質問をしても、相当困ったような顔をされます)。もちろん、「本質を見極める力」とか、「物事を抽象的に考える力」とかいった言葉でその内容を説明してくれる方もいらっしゃるのですが、お互いにどこか不完全燃焼な空気が漂います。ですので、哲学を日頃研究している研究者こそが、「哲学とは何なのか(何をすれば哲学的に考えたことになるのか)」という問いに向き合う必要があるように思うのです。

よく語られるのは、「哲学の本質とは「問い」である」という哲学観です。ですが、もし哲学が(その他の諸学問から区別される)固有の学問なのであれば、単に「問う」という内容以上の条件がもとめられるはずです(なぜなら物理学者だって物体の性質について問うし、政治学者だって理想的な政治体制について問うからです)。それでは、哲学が固有に問う「問い」とはどのようなものなのでしょうか。

私は、(少なくとも)「日常的に用いられる基礎的な諸概念を探究する問い」こそが、哲学に固有の問い(の一つ)なのではないかと考えています。例えば歴史学は過去の事実について研究する学問ですが、「そもそも「事実」とは何か？」ということを問うことはありません(「そんなことを問うと、そもそも議論が進まない」と言われてしまいます)。また、確かに政治学は「政治」について問い、経済学は「経済」について問い、心理学は「心」について問いますが、哲学は単に「政治」や「経済」や「心」についてだけ根本的に問い直すのではなく、それらの概念

と密接に関連する基礎的な諸概念（例えば「世界」、「倫理」、「人間」、「身体」、「他人」など）についても同時に問い直します。ここまで徹底的な仕方で「日常的に用いられる基礎的な諸概念」を体系的に問い直すというのは、まさに哲学に固有な営みであると言えるでしょう。

これは言い換えれば、哲学の思索は「世界観」の探究に直結しているということに他なりません。例えば、哲学は「人間とは何か？」、「世界とは何か？」ということを問いますが、そうした根本的な問いから派生する形で、「人間と動物では何が異なるのか？（本質的な違いはないのか？）」、「理性とは何なのか？（感情との関係は？）」、「人間と世界はいかに関わり合っているのか？」、「言語と世界の関係性とはいかなるものか？」といった問いを連鎖的に引き受けなければなりません。こうした思索を続けていくと、自ずと世界全体についてのマクロな思想体系を組み立てていくことになります。体系的に哲学の思索を展開するということは、ありとあらゆる事象に関する説明を体系的に（矛盾なく）関連づけていくということに他なりません。このように、「哲学的に考える」ということを順次実践していくと、必然的に私たちの思考は「ミクロな直観」から「マクロな認識」へと拡大深化していかざるを得ないのです。そして、こうしたマクロな規模で人間や世界の存在そのものを根本的に問い直すというのは、やはり哲学に固有な営みであると言えるでしょう。

そして私は、「日常的に用いられる基礎的な諸概念を探究する技法」こそが、今日幅広い仕方で社会において求められている「哲学」なのではないかと考えています。例えば企業が広告を制作するときに、「「美」とは何か？」という問いや、「「健康」とは何か？」という問いに直面することはよくあるでしょう。また、昨今のSDGs（「持続可能な開発目標Sustainable Development Goals」）の流れを受けて、各国の企業が「平等」・「平和」・「公正な質の高い教育」・「健康的な生活」・「ジェンダー」などに配慮した製品やサービス作りに取り組んでいますが、「一体どのような条件が満たされたときに「平等」と言えるのか？」、「何が起こっている（あるいは起こっていない）状況が「平和」と言えるのか？」という問いが考えられていないとしたら、私たちはSDGs達成に向けて歩み出すことはできないでしょう（それは地図を描いてもないのに当てもなく歩き回るようなものだからです）。このように、SDGsやESG投資（「環境Environment」・「社会Social」・「企業統治Governance」に配慮する企業に対して行われる投資）が重要視されている21世紀社会において、「日常的に用いられる基礎的な諸概念を探究する技法」としての「哲学」が求められるのは必然的なことであると言えるでしょう。

人間は、目の前の現実に対処しながら生活するのに必死になる中で、普段自分たちが使う概念の意味を自覚的に問い直したりはしません。だからこそ、日頃自明であると思われている日常的な諸概念を根本的に問う知のスペシャリ

スト（哲学者たち）が必要とされているのです。また、これからの時代の行く末を予想したり、これまでの社会の在り方を反省したりするために、マクロレベルの視座が必要とされることも多々あるでしょう。そうしたときに、世界観そのものの探究を行ってきた過去の哲学者たちの思索から学べることは非常に多いはずです。幸福についてアリストテレスが考えてきたことや、歴史についてポール・リクールが考えてきたことは、決して社会にとって「無用の長物」なのではなく、むしろそれは、21世紀の課題を解決するために思索しなければならない難問に取り組むための知の技法に他ならないのです。これこそが、今日の社会において哲学が求められる理由であり、またその際に求められている哲学の内実であると言えます。

このように考えてみると、哲学対話などで「問いが深まる」と言われるときの内容についてもおおよその回答を与えることができます。それは「基礎的な諸概念を探究する問いが連鎖的に提起される状態」であると言えます。例えば、「「勉強」とは何か？」→「生活のために必要最低限な知識を得ること」→「それでは、「知識」とは何か？」→「情報とは異なり、信頼できる学者によって発信された見解の総体」→「「信頼」とは何か？」……という仕方で、問いが展開される様態こそが「問いが深まる」状態なのだと思います。

哲学のイベントにせよ、哲学対話にせよ、このように参加者自身が問いを深められるようなデザインを施していくことが、今後求められていると言えるでしょう。

哲学で起業

吉田 幸司
クロス・フィロソフィーズ株式会社 代表取締役社長

1. はじめに

2017年5月に哲学を事業内容とする株式会社を設立してから約5年。民間企業の仕事から産官学連携に関わる仕事にいたるまで、様々な仕事で哲学を実践してきた。『日経新聞』や『週刊ダイヤモンド』での掲載を皮切りに、数多くのメディアで取りあげていただいたおかげで、弊社事業も広く知られるようになり、ビジネスの現場に弊社の手法を取り入れているビジネスパーソンも数多くいる。

「文献研究や応用哲学研究にとどまらず、もっと実践的なかたちで哲学するには、どうすればいいのか？」――筆者は、こうした思いを抱きながら起業したのだが、今では学術的研究と会社の事業展開が本質的に結びついたものになっている。もともとは、A. N. ホワイトヘッドやF. H. ブラッドリー、W. ジェイムズ、S. アレグザンダーらの形而上学・コスモロジーを研究してきた。哲学の中でもとりわけ実用性から遠いと思われている分野といえるだろう。実際、筆者自身、博士論文を提出し終えたとき、自身の専門研究と現実の世界とのつながりを実感できずにいた。もちろん研究が深まることで、人生や世界の捉え方が根本から変容していくことはあったものの、自らが生きるこの現実世界において哲学は何を果たしうるのか、確信をもてずにいたのである。

しかし、アカデミアの外に一歩を踏み出し試行錯誤する中で、哲学にできることと求められていることがおぼろげながらに見えてきた。以下では、筆者のこれまでの取り組みとこれからの展望を紹介したい。

2. クロス・フィロソフィーズ株式会社について

弊社は、専門的・体系的・対話的な哲学を社会実装する哲学コンサルティングファームである。複数の会社の経営経験をもつ役員やポスドク研究者を含め、哲学畑出身のメンバーで運営されている。2019年からは、北海道大学「人間知・脳・AI研究教育センター（CHAIN）」と連携を組んでいる。

事業内容としては、専門的な哲学の知見を背景にした「哲学コンサルティン

グ」を中心に、クライアントの課題に関するリサーチを行ったり、「哲学シンキング」という弊社独自の手法を使ったワークショップを実施したりしている。ここで掲載可能なものだけでも、リクルートやライオン、パーソルキャリア(doda)、パルコ、日本電設工業といった数々の企業のプロジェクトで、哲学の専門知や方法論を使ったコンサルティングやワークショップを実施してきた。また、企業以外にも、上智大学中世思想研究所の蔵書検索システム「Benedictus」の保守管理や、東京工芸大学のアーティスト向け哲学教育なども弊社で請け負ってきた。最近では、国立研究開発法人科学技術振興機構から委託された「新興科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題」に関する仕事や、自社主催の「哲学スクール」の運営も行っている。

企業で実施するプロジェクトは様々だが、組織開発／人材育成、経営者コーチング／理念構築、コンセプトメイキング／アイデアワーク、マーケティングリサーチ／世代調査などを手掛けてきた。例えば、組織開発／人材育成であれば、「働き方改革」として女性活躍を推進しようとしている企業において、「そもそも女性活躍とは何か？」といった問いを深掘りし、社員と会社の理解のズレを明確化するとともに、目指すべきビジョンを言語化し、仕組み等の変革を通じてその組織が抱える問題を解決したりする。コンセプトメイキングであれば、商品・サービスや広告などのコンセプトを、マーケティングリサーチ／世代調査であれば、生活者の意識や価値観をプロジェクトの対象とするが、いずれの場合も、クライアントの課題のヒアリングに始まり、メンバーのコーディネート、サーベイ、ワークショップ、専門的なコンサルティングを行う点は共通している。目的次第では、成果をヴィジュアライズしたり、思考実験をして仮説形成／検証を行ったりもする。課題解決だけではなく、潜在する哲学的・倫理的な問題を投げかけ、「どうすべきか／すべきではないのか」を一緒に考えたりすることもある。

なかでも、「哲学シンキング」は、多くの企業やビジネスパーソンからの要望があったため、2018年より「哲学シンキング研究所」を立ち上げ、「哲学シンカー」というファシリテーターを養成する事業を展開している。多くの企業では、「デザイン思考(Design Thinking)」という手法が採用されているが、近年、その欠陥が、デザインシンカーたちのなかで自覚されつつあった。「なぜ、このプロジェクトを実施するのか？」「どうすれば、チームで主軸となるコンセプトを作って共有できるのか？」「様々なアイデアや問題提起のうち、何を基準に選べばいいのか？」ビジネスの現場でこういった問題が生じているなか、筆者は、デザイン思考に対照させるかたちで、「哲学思考(Philosophy Thinking)」を位置づけたところ、数々の企業で採用され、多くのビジネスパーソンが弊社セミナーを受講するようになっている。また、「グラレコ」に対照させて「哲レコ(哲学レ

コーディング™)」という図式化の手法をセットにしている。紙幅の都合上、ここでメソッドの解説はできないので、より詳しく知りたい方は、拙著『哲学シンキング』(マガジンハウス、2020年)や、弊社オウンドメディア『BIZPHILO』(https://bizphilo.jp/)の記事を参照していただきたい。

3. ビジネス×哲学のさらにその先へ

さて、冒頭でも書いたように、「この現実世界において哲学は何を果たしうるのか」という問いへの挑戦として筆者は起業したのだが、哲学の専門知を背景に哲学的思考を駆使すれば、企業や社会の様々な課題を解決できる。特に、ESGやSDGsをはじめ、企業も社会課題への取り組みが求められている今日においては、「自分たちの事業の本質や存在意義は何なのか？」「社会との関係性はどうあるべきか？」を問うことの重要性が増している。企業経営においても、個々のプロジェクトにおいても、そうした問いを掘り下げ、言語化する上で、哲学は大いに助けとなる。

弊社は、組織、あるいは経営者、プロジェクトチームがもつ、個々の思いやストーリーを引き出したり、上記のような問いについて共に考えたりする支援をしているわけだが、そうしたとき、哲学コンサルタントは何をしているのか。このことを考えるために、ホワイトヘッドの教え子でもあるS. ランガーの次の議論を引き合いに出してみたい。

例えば、「誰が世界を創ったのか」という問いが与えられたとき、神が創ったとか偶然の産物といった様々な解答が可能である。しかし、「誰かが創ったわけではない」と答える人がいたら、その人は、ある意味で問いを拒否していることになる。その返答は、発問者の思考の枠組み、ないしは精神の定位(orientation)を否認しているからである。世界は生まれたという前提を否認しているだけではない。むしろ発問者が、「では、世界はいかにして現在の姿になったのか」と問い直すときの、「なった」と取り扱ってしまう「自然な考え方」も否認している。それは「世界観」とか「精神態度」とも呼べるものであり、注意が向けられる事実や、議論にあがる命題より奥深くに潜んでいる。ランガーは、「哲学においては、問題のこうした方向づけが、学派や運動、時代が貢献する最重要事項である」という(*Philosophy in a New Key*, Harvard University Press, 1957, p. 4)。問題の方向づけのもとでこそ、様々な体系が生じ、覇権を握り、消滅するのであり、問いは枠組みを作るだけでなく、視点の角度や色調、描像が画かれるスタイルをも与えるからである。

弊社はまさに、哲学的な問いかけを通じて、組織や経営者、プロジェクトチームの、意識されざる前提や偏見を明るみに出し、その背後に隠れている世界観を言語化する支援をしているのだと思う。あるときには、新たな観念体系を提

案することでその世界観を拡張したり、クリエイティブにより可視化したりもする。

では、そうした哲学の仕事は実社会でどんな意味を担いうるのかといえば、もっと望ましいかもしれない別の選択肢を差し出すことだと筆者は考えている。クライアントは課題に対する解決策を求めて弊社に依頼をしてくるわけだが、解決策以前に課題設定そのものが適切ではないことがよくある。例えば、会社が良かれと思っていた施策が社員の思いとズレている場合がそうであるように、最初の課題設定の解決に向けて動き出してしまっていたとしたら、むしろ損害を被る人がいたであろうということもある。これに対して、それぞれのステークホルダーの声に耳を傾け、立ち止まって考える哲学思考は、悲劇を避け、より望ましい方向へ導くことに貢献できるに違いない。

特に経営層を交えた仕事をしているときに感じることだが、経営層の意識が変わることで、企業全体のあり方が変わるのだろうと思うことがある。関連するステークホルダーを含めれば、その波及力はさらに広範に及ぶ。上述した事業の本質、企業の存在意義、社会との関係性に関する問いは、もはや経営者だけの問題でもなければ、一企業だけの問題でもない。哲学思考を取り入れる企業が増えていくことで、社会がより望ましい方向へ変革されていくという確信をもって筆者は事業を展開している。

とはいえ、哲学は単独では、ほとんど無力に等しい。科学技術やデザイン、アート、メディア、そしてファイナンス／ビジネスなど、様々な領域との有機的な関係のなかで初めて哲学は有効に機能する。筆者はこうした思想をホワイトヘッドの「有機体の哲学」から継承している。多様な存在者が固有の価値を毀損することなく共生する世界を実現するには、人類がもつあらゆる知恵を統合してグランドデザインを描く必要があるが、そのために形而上学から学べることは多い。さらには形而上学を超えて、世界の動態的で歴史的な進展を物語るコスモロジーないし形而上史は、10年後、あるいは100年先の未来社会も見据えながら、バックキャスティングで今なすべきことを考えられるように視野を広げてくれる。地球規模の社会課題に直面する今日、企業経営にも、コスモロジカルな眺望をもつ哲学が必要とされているのではないか。

わたしのことば

Eri Liao
歌手

日立駅の前のイトーヨーカドーへノートを買いに行った。気持ちのいいノートがあれば言葉もするする出てきそうだし、日立で買うのもいいと思った。私はお墓参りに来ていた。私の父は茨城県日立市の出身の日本人で、私が自分のことを「半分日本人です」と人に言う時、私は日立の人たちとの血縁においてそう言っていることになるが、何しろ父は親戚付き合いが大嫌いだったので、日立に今もいるであろう親類縁者を私はほとんど知らないし、父と日立に来たのも一回だけだった。

母によればその時私はまだ幼稚園に上がる前で、母と二人台湾に住んでおり、父母に婚姻関係はなかった。わかりやすく下世話に言えば、父は台湾の若い愛人とその愛人との間にできた子を連れて、わざわざ自分の生まれ故郷へ出向いたわけだった。日立は海沿いにある町で、父母と海へ行ったこと、お墓参りに行ったこと、泊まったホテルの部屋の灯りのぼんやりとした色合いなどをなんとなく覚えている。写真が残っていて、私は赤いワンピースの水着に、カラフルな飾りのついた麦わら帽子、海を見るのははじめてだったはずだ。波打ち際には、つばの大きな麦わら帽子、紺色の水着の母もいる。お墓参りはほとんど覚えてないが、ひどく蚊に刺されたのは覚えている。台湾から母と私を呼び寄せて、日立へ行って海を見せて、普段しないだろう墓参りまでした父のことを考えると、家族の思い出というより、人ってなんかこういうこと（愛人を連れて故郷へ行くetc.）するよなあ、という冷めた感慨があった。

日立なので墓参りくらいなら日帰りでできる距離だが、せっかくなので泊まっていくことにした。二年ほど前から私は『常磐炭坑節』をレパートリーにしていて、ちょうど新しいアレンジを考えていたこともあり、日鉱記念館や鉱山資料館に行きたかったが、この年のお盆はちょうどオリンピック期間で新型コロナ感染者が増えてきた時期に重なり、茨城県も緊急事態宣言を出したためどちらの施設も休館、日立市の郷土博物館も休館となっていた。と言ってお墓参

りを延期するのもなんだし、私は予定通りに出発し、品川駅でお弁当を物色し、特急ひたちに乗った。コロナ前まで、母は毎年台湾から日本へ来ていて、必ず日立へお墓参りに行った。私は一緒に行く時もあったし行かない時もあった。父方の祖母とは私が中学生の頃から同居していたが、祖母は足腰が悪くてほとんど自室から出られず、祖母とほぼ唯一交流があったのは介護していた私の母だった。私は母方の祖母が大好きで、小さい頃いつも面倒を見てもらっていておばあちゃん子で非常に懐いていたが、父方の祖父母には小学校二年生の頃、台湾から日本へ母と一緒に引っ越してきた時はじめて出会った。祖父母は日立の土地を売って買ったという都内のマンションに住んでいて、夫婦仲がよくなさそうで、家の中は散らかっていた。母はよくおかず（肉じゃがとかかぼちゃの煮付けとかの日本食）を多めに作っては祖父母のマンションまで届けに行って、その時は私も一緒について行ったが、この日本人の祖父母に対してどうしても、台湾のおじいちゃんおばあちゃんに当たり前に感じている親しみを抱くことができず、子どもながらそのことに罪悪感を感じていた。

日立へ最後に行った時は母と二人で、母の行くお墓参りはルートが決まっている。駅を出て広場を通ってイトーヨーカドーに入り、出口前のお花屋さんでお花とお線香を買って外に出て、商店街を歩いて大きい通りに出て、通り沿いのローソンでライターや水（お盆ごろの日立はとても暑い）を買って、その先にあるお寺でお墓参り、また同じ道を通って戻り、商店街のお店でランチを食べて帰る。母のこのルートに数回同行したが、ここを歩いてお墓参りをしても、日立という町にどう愛着を持っていいのかわからなかった。お店の店員以外、街にほとんど人を見かけなかった。駅舎はガラス張りで、ガラス越しに海が見えて美術館のように洗練され美しいが、白いコンコースを抜けるとがらんとしていた。正面に駅前ロータリー、信号を渡って左前方に広場がある。人のいない広場は、奥に見えるプラネタリウムの大きな球体が飛び出た建物と合わさって、広場というより巨大かつ堅牢な建築物、まるで要塞のように見えた。照り返しがひどくまぶしく、暑い。

ホテルでチェックインをし、翌日の予定を立て、夕方になるのを待って買い出しに行った。緊急事態宣言下で、「この辺はもともとお店が閉まるのが早いんですが、どこも更に早くなっておりまして…」とフロントの女性が申し訳なさそうに説明し、それならばと、イトーヨーカドーの地下で、半額になったお刺身とお惣菜、ワイン、朝用にコーヒーを一パック、牛乳、上の階の本屋さんでノートを一冊買った。人の町のスーパーへ行くのはいつも楽しい。時間をかけてうろうろし、肉、魚、野菜、地元のものをチェックして、ここで夕飯の買い物をする

日常を送る人たちとなるべく溶け込むように振る舞う。

ホテルに戻ると、部屋の机に夕ごはんを並べ、ノートの最初のページを開け、真ん中のミシン目を指で上下になぞってひらいた。私はホテルの部屋備え付けのペンというものが好きで、時々こっそりカバンに入れて、知らないふりをして持ち帰る。このホテルのペンは書き心地が滑らかで、当たりだなと思いながら買ったばかりのノートにいざ書き始めてみると、まるで言葉が出てこなかった。

翌朝、お墓参りへ行った。一人で行くのははじめてだ。丈の長い白のワンピースを着ようと決めていた。父は助川町に住んでいたと聞いていた。助川町は今はなく、かつてのあたりにあるお花屋さんを調べて、そこの開店時間に合わせてホテルを出た。ホテルからは歩いて20分ほどの距離で、楽しみに向かったが、特徴のない住宅地がひたすら続き、やたらと暑かった。そうか、全部焼けたんだ、と思い出した。戦時中、日立は日立製作所の軍需工場が米軍に狙われ、大規模な空襲に遭っていて、祖父母や父たちの住んでいた家も焼けた。耳をすまして歩いても、昔の街並みの気配は感じられず、暑い、暑い、としか考えられない。空襲の時小学生だった父は、近くにあった馬小屋に逃げ込み、中では繋がれていた大きな馬が、爆弾を受けて死んでいた。倒れた馬の後ろに父が隠れていると、死んだ馬の尻の穴から「ブウウウ」と、父の目の前で馬がおならをした「あの音が俺は今でも忘れられない」と父は何度か私に話した。

助川町の花屋さんの名前はフランス語で、店先の花々も洒落ていた。祖母は若い頃この辺りに住んでいて、それはおばあちゃんではなく、若く活発な女性の祖母がここにいて、この辺の道をあっちやこっちへ歩いたり、走ったり、当時この店はなかっただろうが、折々に花屋へ行って花を買ったりしただろうと思うと、急に胸が締め付けられるようだった。私の知っている祖母は、年老いて、腰が曲がって、出かけるのは車椅子で、いつも地味な服装で、口を開けば祖父を「あの腐れじじい」と罵っていた。

花屋の中に入ると、ちょうど時期だからか、一角に菊の花がたくさん入った花桶が並んでいた。菊もいいけど、せっかくだしもう少し洒落た花をお願いしようかと、広いお店の中を回ってお花を探していると、入り口から中年くらいの男性が入ってきた。お花屋さんにあまりそぐわない感じの、いかにも北関東のおじさんといった風情のその人は、

「誕生日に送る花束をください」
と言った。へえ、と私は思わず振り返ってもう一度その人を見た。穏やかそうな人だった。その人の訛りはおばあちゃんがおじいちゃんの悪口を言いながらだんだん興奮してくると飛び出す訛りに似ていた。誕生日の花束が仕上がるのを待って、お墓参り用の花束が欲しいんですが、と私はお店の人に言った。可愛らしい菊の花束を二つ作ってくれた。

暑ければ途中で喫茶店にでも入って涼めばいいと思っていたが、喫茶店はどこにも見当たらなかった。墓石に水をかけて磨きながら、自分もその水をかぶりたいぐらいで、何も考えられない頭でひたすら墓を掃除し、やっときれいになって手を合わせる頃には汗が止まらず呆然としていた。死ぬ直前まで離婚だなんだとやり合っていた祖父母は、同じ一つのお墓に入れられていて、祖母が祖父に対するのと同様に罵っていた曽祖父も同じお墓だった。死人に口なしという言葉が浮かんだ。

お墓参りの後、もう一度助川町の方へ歩いた。焼け残ったという神社にお参りをして、長い坂道を上って、かつて城があった跡を歩いた。暑くて何が何だかよくわからなかった。城の跡の公園からきらきらと太平洋が見えた。帰りはバスに乗って日立駅前に出て、またヨーカドーで刺身を買ってホテルに戻った。机の上に刺身を広げ、昨日買った醤油を出し、飲みさしのワインを出し、食べ残しのおにぎりを出し、ノートを広げ、ボールペンを持った。

日本語。タイヤル語。中国語。台湾語。英語。広東語。インドネシア語。

私の家族が話す言葉を書き並べ、それぞれの言葉の下に、その言葉を話す家族の名前を書き連ねていた。その作業をしながら、話せるって何だろうと考えた。言葉を使って私は何を話しているのだろう。今も。ノートから目を上げると、鏡に映る私と目が合った。私は私の像を見ながら、ひとりで話し始めた。最初は私に向かって、そのうち誰というわけでもない誰かに、とりとめもなく、わたしのことばだ、みんなのことばだ、そうだ、言葉だ、歌だ、声だ、口癖だ、カラオケだ、おばあちゃんだ、母だ。私は日立に来れてよかったなと思っていた。私はただそのことを話していた。それ以外のたくさんの言葉を使って、ここに来られてよかった、と、私に、誰というわけでもない誰かに、一生懸命話していた。

居場所、居場所と言うけれど、そもそも居場所ってなんなんやろう？

渡邊 洋次郎
リカバリハウスいちご　生活支援員　介護福祉士

今回は樹の下ホームの志村さんとの対談を通して、今一度自分自身にとっての居場所について考えました。過去の自分には居場所はあったのか？それとも無かったのか？そもそも居場所ってなんなのだろうか？今の自分には居場所があるのか？それとも無いのか？

まずは、幼少期からの自分自身について書いていきます。5人家族の長男として生まれました。3歳上に姉がいて、3歳下に妹がいました。両親は共働きをしているいわゆる普通の家族でした。小さな頃は保育所に行っていました。同い年の友達とうまく馴染めなかったので、裏庭みたいなところでダンゴムシばかり集めていました。言語での発信も五歳になるまで無かったと後々に母親から聞きました。うまく溶け込めなかったのは本当でしたが、特別そこが苦手とか嫌な場所では無かったように記憶しています。小学校に上がってからは勉強がほぼ全て0点でした。スポーツも全然出来ませんでした。自分のアトピーや喘息についてはとても嫌でした。同級生の男の子の腕や足と自分の体を見比べては、自分は汚い、自分は醜いと思うようになりました。小学校の低学年、二年か三年の頃にはスーパーマーケットから万引きをしたり、プチ家出をしていました。フカシでしたが父親のタバコを盗んで吸っていたのもその頃でした。

当時、年に二回お盆とお正月には家族みんなで田舎があった四国の香川県まで里帰りをする習慣がありました。両親が共働きだったので、行きや帰りに母親がいない時がありました。子どもだった私から姉や妹を見る限り、普通に過ごしていましたが、私だけが母親がいない事が理解出来ず、発作を起こしたみたいに泣き続けていました。母親がいなくて淋しい気持ちを父親に言うと、父親は不機嫌になりました。母親はというと生活をしていく為の共働きだったから息子からそんな訴えをされて、困惑してしまう母親でした。子どもながらに、そんな母親の姿を見るのが嫌でした。自分の淋しい気持ちを受け入れてもらえない、こんなに淋しくてどうしようもないのに我慢するしかないんだみたいな

気持ちでした。

同時に当時の私にとって家族や母親は大切な存在でしたので当然、困らせたくない、穏やかであって欲しい気持ちがありました。家族や母親の平穏を壊さないために、自分が我慢をするようになっていきました。タバコを吸ったり、万引きしたり家出をして一見不良少年みたいな行動を繰り返していましたが、きちんと自分を持ってて、他者とも向き合い、自己主張していたかというと全く逆でした。目の前に人が現れると向き合わずに逃げ出すように行方をくらます子どもでした。

学校の決まりや教師から言われる言葉が理解出来ませんでした。時間割表の意図を理解して活用したり外履きで登校しても、屋内の教室に入る際は室内用の上履きに履き替えて教室に入るとか、同級生が普通に出来ている事が私には出来ませんでした。当時の自分を今、振り返ってみると何が分からなかったか、何に困っていたかが分かるので、「分からないから教えて欲しい！」や「これが出来ないから、手伝って欲しい！」と言えますが、当時の私は違和感は感じていましたが、何にどう自分が困っているかも分からないので、外に向けてSOSを発する事は出来ませんでした。中学校に上がってからはシンナーを吸ったり、バイクを盗んで乗り回したり、警察にも捕まるような非行が始まりましたが、小学校の頃に同級生を前に虫を捕まえて食べたり、同級生のしたオシッコを飲んで見せたりしていたのも、ある部分では共通した何か足りないモノを補う方法だったと思います。最近で言えば、キャラを作ると言うのでしょうか。当時の自分がどんな少年だったかは別として、友達という集団の中で受け入れてもらえる自分、集団の中に設定された各人の人間像を演じる事でそこに居場所みたいなものを見つけていたんだと思います。中学校に上がってからの非行も周囲の友達がしない犯罪行為をしていた事で周りが自分に関心を持ち、声をかけてくれたり、質問してきて、それに応えることで自分が話題の中心になり、主体的に関係性を構築しているような感覚がその中にありました。周囲の大人や友達、家族という自分以外の他者との繋がりが見えてくる事で、同時に自分の立ち位置が確認できていたような感覚でした。そこさえ死守すれば自分が思うように生きられる感覚でした。

その後、私は少年院や精神科病院への入退院を繰り返すようになっていったのですが、「酒や薬をやめて素面になれ！」と言われる事にものすごく抵抗しました。酒や薬の酔いが好きとか楽しい、気持ち良いという感覚があったのは本当でしたが、それ以上に「素面になんてされてたまるか！」という気持ちが強くありました。私にとって素面とは世捨て人のように生きる上での楽しさや嬉し

さを全て奪われ、喜怒哀楽も無いままに生きる事を強いられる事でしかないと思っていました。中学生の頃に同級生に校舎裏に連れていかれ、「この学校で喧嘩の強い奴を順番に３人言え！」と言われてそれに言い返す事も出来ないまま、一番誰々、二番誰々と言っていき、最後に蹴っ飛ばされ、もうええで！と言い捨てられる場面が蘇ります。当然同級生にそんな風に扱われて、腹も立つし、やめろ！とも思います。自分に対して惨めだし嫌いでした。それなのにハッキリと意思表示も出来ず、モジモジしながら本当に嫌なの？相手してもらえて喜んでるのと違うの？みたいにしか受け取れないような態度しか表せない自分が本当は大嫌いでした。学校や大人、他者、社会という大きな力を前にいいように扱われて、消費されてお終い。そんな圧倒されるような大きな力の流れを前に何一つ抗えない非力な自分、無力な自分が私にとっての素面というものでした。だからこそ非行や薬物使用をしてそこに抗う事が、力を得て自分が自分を生きる感覚をくれました。

中学校を卒業して沢山の不良仲間とつるんだ頃。10人を超える友達と溜まり場に集まってビニール袋に入れたシンナーをスーハースーハー吸っていた頃。頻繁に警察に逮捕されて入所していた少年鑑別所や少年院。少年院を出てきてから就いたホストの仕事。酒をあおり女の子と遊んで、好き放題していた頃。実家に住んで好き放題な生活をしていた頃。確かに私はそこに暮らしていましたから場所としての居場所はありました。

二十歳から始まった精神科病院での歳月も生活する病棟や病室があって、寝るベッドはあったので居住空間としての居場所はありました。少しでしたが医療者や支援者との人間関係もありました。小学校からの同級生の一人はその頃も繋がりを残してくれていました。

三十歳から三年間服役した刑務所でも一年半の雑居房、一年半の独居房と生活をする空間はありました。三十三歳で刑務所を出てきて、現在の職場でもあるリカバリハウスいちごとの出会いや繋がりを通して行ける場所、会える人達は出来ました。酒や薬をやめる為に通った自助グループもあったので、そこに行けば仲間がいるんだと思える場所もありました。

だから居場所を場所として考えると、この世に肉体を持って生きている以上、どこかには身を置いて生活しているので居場所はありました。

しかし、自助グループのミーティングへ参加する中で感じたのは、単なる場所としての居場所じゃなく、なんでここに自分は居るのか？という理由を持っている事がくれた居場所の感じでした。また、リカバリハウスいちごの職員として通所される利用者さんの言葉から感じたのは、確かに物理的な肉体は町の

中に置かれていても、依存症の進行過程において家族や仕事、住む場所等を失ってきた人達や社会的な肩書きや立場を失ってきた人達にとって確かに物理的な肉体は町の中にあっても、本当に町に生きている、社会に生きていると言えるんだろうか？と言う疑問でした。その頃から居場所とは単なる場所や環境を指す言葉なのだろうか？その程度に留まる考え方なのだろうか？という問いかけが自分の中で生まれました。

幼少期や少年期に私がとった様々な行動や生き方も、実際の場としての居場所とは異なるモノでしたが、私には居場所のような感覚をくれていました。生き方や生きるスタイル、価値観、自分像が周りの環境とは全く別物の実感として私にここに生きている感覚やこれが自分なんだ！という感覚をくれていました。暮らす環境としての家庭や学校、鑑別所、少年院、精神科病院、刑務所等々はあっても、そこが自分の居場所になるかならないかはまた別であった気がします。不良少年達と一緒に放浪みたく、道端を転々としていた時に確かに居住空間としての安住の地は無くても、この世の中、この社会の中で私はここに生きているんだという感覚があったり、「居場所」という一つの言葉を通しても、本当に様々なんだと改めて感じました。

それは私にとっても様々なように、他者にとっても様々だろうし、人が100人いれば100通りの解釈があって当然だとも思うようになりました。周囲に友達がいても居場所があると感じるか無いと感じるかはそれぞれ違うと思うし、生活空間としての場所があってもそこを居場所と感じるかどうかは人それぞれ違う。この町の中に肉体としての自分が存在していても、町の中に生きる人間だと思えるかどうかは違うし、生きる事自体が常に彷徨い続けるようであっても、何かに根を張って生きているような感覚を感じている場合もあると思います。私自身は自助グループの中で見つけた自分を超えたハイヤーパワーとの出会いから常に自己と対話をしつつ生きているような感覚が、不安定で不確かなこの世においても確固たる確信を持って生きられている大きな要因だと感じています。生きる方向性というか、人生の方向性、方角みたいな感覚でした。生まれた命が人生を歩き抜き、死という終止符へ向かって流れ続けるその方向、命が始まり、終わりへと向かうその感覚を持てた時からこの身は物理的な世界に在りつつも、五感を介して確認する世界じゃない世界に在り続ける自分みたいなモノを感じるようになりました。生きる上での信仰心を持ったんだと思いました。世の中の法律や決まり、常識、正義というモノに沿って生きる自分じゃなく、そう言ったあらゆるモノが取り払われた世界にあっても、自分が自分と対話をして、何に沿い、どう生きる

のかを自分の中に持てる感覚です。そんな中に居場所とか生まれた事、この世界との和解が起こったと感じています。